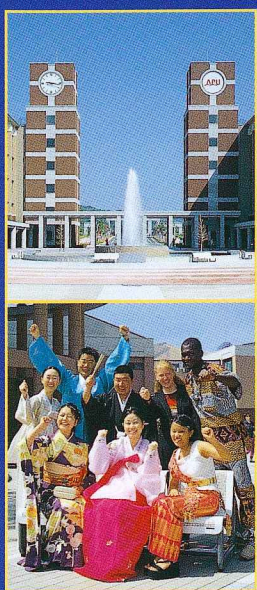


APU



APU Students

立命館アジア太平洋大学
Ritsumeikan Asia Pacific University

Academic

リーダーシップと行動力——21世紀を切



立命館アジア太平洋大学（APU）は、21世紀の国際社会をリードする人材を育成するために新しく誕生した、日本で最初の本格的な国際大学です。

大学には、アジア太平洋地域の未来像を描き、それを実現するための具体的な課題と解決の方法を追求する「アジア太平洋学部」（APS）と「アジア太平洋マネジメント学部」（APM）の2学部が設置されています。

世界50を超える国・地域から集まった国際学生が学生の半数を占め、教員も半数が外国籍という多文化環境のキャンパスで、英語と日本語の両言語を駆使しながら、国内学生と国際学生が互いに刺激しあって国際感覚と専門能力を磨いています。

すぐれた言語能力と異文化コミュニケーション能力を基礎に、①果敢に未知の世界に挑戦し、自らの未来を創造する、②直面した課題に具体的な解決策を発見する、③課題を解決するためにふさわしい行動力とリーダーシップを備える、というAPUの学生像をめざして、日々自己研鑽に励んでいます。

彼らがめざすのは、国内学生も国際学生もグローバル舞台です。

国際感覚豊かで、従来の価値観にとらわれず、チャレンジ精神に富んだ新しい個性にぜひご期待ください。

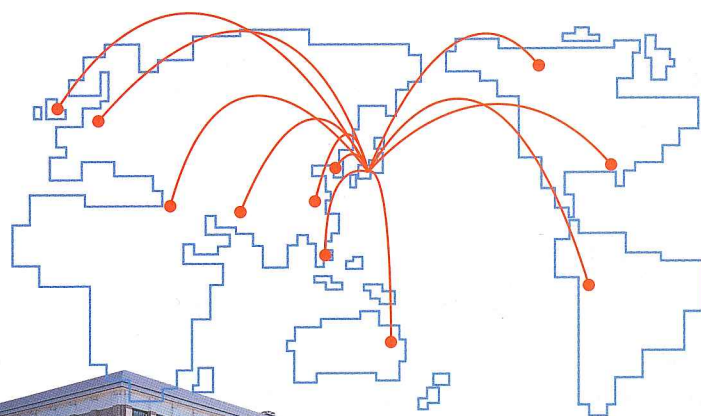


Frontier

り拓く新国際派の個性たち



立命館アジア太平洋大学
学長 坂本 和一



Forum

国際感覚を身につけ、未来に挑戦するwit



椎名 武雄氏

SHIINA Takeo

日本アイ・ピー・エム株式会社
最高顧問 兼 経営諮問委員会議長

1953年日本アイ・ピー・エム株式会社入社、62年取締役就任。75年には社長、93年には会長兼経営諮問委員会議長、99年から現職。IT戦略会議委員、電気通信審議会委員、航空審議会委員等政府関係の委員、経済団体連合会や経済同友会などの要職も広く務めておられる。また、立命館アジア太平洋大学の開設に早い時期から関心を寄せられ、96年よりアドバイザー・コミティメンバーに就任していただいている。

さまざまな国・地域の学生が 一緒に学ぶ重要性

司会 先日はAPUにお越しいただき、すばらしい講演会をありがとうございました。今回は進路・就職支援の一環として、椎名さんの哲学、そして学生たちへのアドバイスを是非お聞かせいただきたいと思います、5名の学生を連れてまいりました。それではまず、学生たちに自己紹介をしてもらいましょう。

大山 アジア太平洋マネジメント学部の大山です。東京で生まれ、中学3年の時に母の仕事の関係でニュージーランドに移住しました。幼い頃アメリカに少しいたこともあり、英語に興味がありましたが、自分のためにもなると思い、母について行くことに決めました。

エンゴー マレーシアの首都クアラルンプール出身のエンゴーです。アジア太平洋マネジメント学部で学んでいます。APUに入学する前はおもに科学と数学を学んでいました。今は以前とは全く異なるマネジメントについて学んでいます。今年2年生になりますが、生産・物流についての科目を選択しようと思っています。どのように生産がコントロールされているのか、そのプロセスについて興味があるのです。またIT（情報技術）についても学びたいと思っています。APUに入学する前はより高い学歴を持って就職するため、有名大学を選ぶことが目標でした。しかし1年経ち、APUは私が考えていた以上のことを与えてくれていることに気づきました。今後は3年で卒業できる早期卒業プログラムを選択し、日本企業でインターンシップに参加したり、ケーススタディを行なったりしたいと考えています。将来は日本企業で働きたいと思っています。

アウン ミャンマー出身です。首都ヤンゴンで育ちました。大学で技術を学び、一度就職しました。仕事の関係でミャンマー各地を旅した際に僻地を訪れる機会があり、その発展に貢献したいと思い

留学することを決めました。なぜ日本を選んだのかというと、日本は高い技術力を持ちアジア太平洋地域の発展に貢献しているからです。APUではアジア太平洋地域のさまざまな文化に触れることができます。そして観光についても学べます。将来は日本語の通訳をしている兄とともに旅行会社を設立したいとも考えており、ミャンマーが将来、日



本の新しい旅行目的地となるように努力したいと思っています。アジア太平洋地域には多くの貧困地域があります。貧困を解決するための一村一品運動を研究するサークルをAPUでつくり、活動中です。

吉川 吉川千晴と申します。小学生の頃ニュージーランドのクライストチャーチに住んでいました。その後、中学高校時代を大阪のインターナショナルスクールで過ごしました。10年生の時、1年間中国の上海で中国語を学びました。

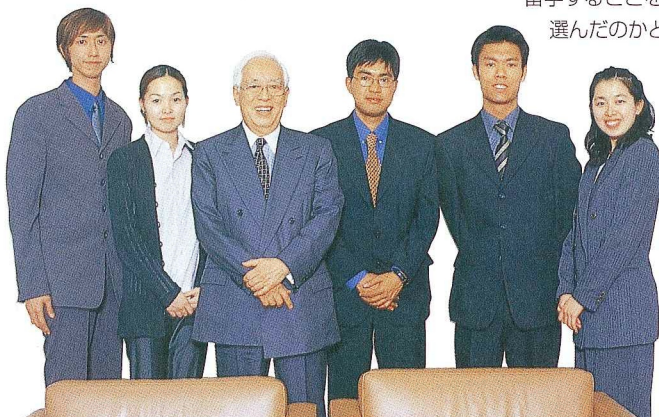
椎名 中国に行く前に中国語を勉強したのですか。

吉川 いいえ。

椎名 勇気がありますね。（全員笑）

吉川 はい。なにも準備せずに中国へ行って友達をつくりました。将来したいことはまだ特に決めていませんが、中国に1年住んだ経験から感じたことは、非常に開発が進んでいる上海のような大都市が、緑は少なく水は汚染されている環境にあるということです。それで、環境を考えながら都市の開発をどのように進めるか、ということに興味を持ちました。

アルビン シンガポール出身のリー・アルビンです。アジア太平洋マネジメント学部で学んでいます。高校時代はエンジニアリングについて学んでいました。高校のインターンシップで3カ月間、静岡県の子会社のマルチメディア部門でホームページを作成する仕事に携わりました。日本のビジネス界では規制や法律が非常に厳しいことなど、シンガポールとは事情が異なることがわかりました。その3カ月間で日本語がある程度わかるようになり、国に戻ってからは2年半の徴兵制度で軍隊に在籍していました。



2001年1月、APUで開催されたトップ講演会で素晴らしい講演をしてくださった日本IBM株式会社最高顧問 椎名武雄氏。
 今回はAPUを代表して5名の学生が東京・六本木の日本IBM本社に椎名氏をたずね、座談会を行いました。
 21世紀のビジネス界で求められることを模索中の彼らに、
 ビジネス界の大先輩である椎名氏から貴重なアドバイスをいただくことができました。
 ※なお、この座談会は全て英語で行われました。

●●●座談会

h Business Leaders



椎名 どうして静岡に来たのですか。

アルビン 高校ではケーススタディとして外国（日本、ドイツ、フランス）かまたは国内かを選択できました。日本を選んだのは、日本の考え方をシンガポールに持ち込んだらとても素晴らしい発想が生まれるだろうと思ったからです。その後、シンガポールで東京に本社がある人材マネジメントの会社で働きました。幹部はほとんど日本人で、日本の会社のマネジメント方法は大変素晴らしいと思いました。

司会 では、椎名さんにAPUにいらっしゃった時の印象を聞いてみましょう。

椎名 初めに非常に良い印象を持ちました。施設は素晴らしく、キャンパスからは別府湾や別府の街が見下ろせ、建物もたいへん美しくデザインされていました。次に妻とともに感動したことは、学長とキャンパスを見学している時、学生の皆さんが私たちに「こんにちは」「いらっしゃいませ」などと挨拶してくれたことです。お気づきのように、日本では挨拶をするという良い習慣が失われつつあります。もし東京で誰かに挨拶をすると、その人はきっと変な目であなたを見るでしょう。（全員笑）

3つ目の好意的な印象は、50を超える国・地域からの学生さんが一緒に一軒屋の下で勉強しているということです。講演では、他国の人々とともに働きともに暮らすということがこれから必要になってくると申しました。たいへん難しいことだと思いますが、それを実現するAPUのような新しい大学を創設するという立命館のトップの方々のアイデアに、私は尊敬の念を抱いています。今日もこうやって外国の学生さんと日本人の学生

さんとお話していますが、皆さん大変楽しんでいらっしゃるようです。APUの生活については入学前の期待以上のものを得ていらっしゃるようです。講演でも、学生たちはたいへん良い質問をしてくれました。このようにうまく行っている大学は日本では他に見られないと思います。

グローバル化に必要なもの

司会 先日の講演で椎名さんは日本を蘇えらせる3つのポイント、IT革命、規制緩和、そしてグローバル化についてお話くださいました。そこで、次に真のグローバル化とは何かについて話し合いたいと思います。

エンゴ APUでは多くの外国人が日本人とともに大変楽しく過ごしています。私の国マレーシアや他の東南アジアの国でも日本のことが大流行で、毎日、日本のTVドラマが放映されていたり、日本の歌が流れています。日本の食べ物やマンガにいたるまで、最新の日本情報を追いかけています。一体グローバル化の定義とは何なのでしょうか。

椎名 いい質問ですね。日本でも子供たちはアメリカのものが大好きです。このように異国からきたものに魅了されるということは、どうも人間の性質のようです。それは別に悪いことでもアイデンティティを失うということでもない、と私は健康的に考えています。真のグローバル化とは個人の根本を変えてしまうこと、または個人の考えを変えてしまうことではないのです。太平洋戦争が終わった時、私は旧制高校の4年生でした。当時私はアメリカのすべてを勉強したいと思っていました。歌や服装、なんでもです。戦争ですべてを破壊された日本から見て、アメリカのすべては大変素晴らしく見えました。しかし、そうだからと言って私は純粋な日本人としてのアイデンティティを失ったとは考えていません。1951年にアメリカに留学したのですが、当時2,000名規模の大学の中で私は唯一の日本人でした。一度として自分が日本人であることを忘れたことはありませんでした。

グローバル化のためには、自分の国だけでなく他の国にももっと接触することが必要です。APUのように外国の学生や異文化と交じり合うことができる環境に身を置くことは大変良いことです。しかし、同時に自身のアイデンティティを忘れないようにしてもらいたい。もし、自分の国が嫌なら他国の人になったらいいでしょう。それも可能です。しかし、それはあなた自身が決めることです。マレーシア人でしたとしても日本の歌や文化を楽しんだりできますよね。



大山 高
OYAMA Takashi

アジア太平洋マネジメント学部 (APM)
2回生
ニュージーランド・
Middleton Grange School出身



リー・エンゴ
LEE, Eng Ngor

アジア太平洋マネジメント学部 (APM)
2回生
マレーシア出身



リー・アルビン
LEE Alvin

アジア太平洋マネジメント学部 (APM)
2回生
シンガポール出身

Forum with Business Leaders

国際感覚を身につけ
未来に挑戦する



アウン・リン・ティン

AUNG Lin Htin

アジア太平洋学部 (APS)
2回生
ミャンマー出身



吉川 千晴

YOSHIKAWA Chiharu

アジア太平洋学部 (APS)
2回生
大阪府・千里国際学園高等部出身



荒川 宜三 (司会)

ARAKAWA Yoshizo

立命館アジア太平洋大学 国際部長
アジア太平洋マネジメント学部 (APM)
教授

エンゴー APUでもマレーシア人として扱われますし、祭りの時などには民族衣装を着たりしますが、日本の温泉にも行くんです。楽しんでます。

アウン グローバリゼーションが進めば、どの言語が使われるべきだとお考えですか。現在英語が広く用いられていますが、英語圏の文化を持たない人にとって不利にはならないのでしょうか。

椎名 私が学生の頃、エスペラント語を普及しようとする運動が起きましたが、皆さんで存知の通り成功しませんでした。どうしてかはわかりません。しかし今振り返りますと、作弄的な言語でコミュニケーションを取ろうとすることは間違いだったと思います。すでに日本語や中国語などの言語が存在しているのです。エスペラント語とは1つのものの見方だったのだと思います。さて、どの言語を私が学生に勧めるかですが、まず英語ですね。今こうして皆さんと英語でお話ができますから。次はおそらく中国語です。将来、中国の人口は台湾や香港を含め増えていきます。中国のパワーといったものも大変速いスピードで世界中に広まっています。そして日本語もお忘れなく。(笑)

IT革命によって縮小する 世界の経済格差

吉川 グローバリゼーションが進むなか、IT革命が世界中で広まっているとのことですが、ITは先進国だけで広まり、発展途上国では広がっていないのでしょうか。アウン君が言っていたようにいくつかの国には貧困があります。ITはどのように広まっていくとお考えですか。

椎名 いいポイントを突いていますね。ITによってもたらされる経済格差、いわゆるデジタルギャップまたはデジタルデバイドは確かにあります。しかし、20世紀の自動車や電話回線、そしてテレビなどの普及の際にみられた生活水準の格差は、それらを使用する費用が高かったためです。私が育った当時、岐阜県の郊外の町では、人口約18,000人に自動車は2台しかありませんでした。電話は約200台でした。電気冷蔵庫は2台だけでした。50年後の現在、人口は約500,000人までに急増し、電話や冷蔵庫、自動車が何台普及しているかはわかりませんが、おそらく人口より多い数だろうと思います。しかし、こうなるまでに50年もかかっているのです。

ITの話に戻りますが、半導体部品の主体となるシリコンウェハーの技術費用などはどんどん安くなっています。例えば中国では、インターネット人口はすでに日本を上回り、平均所得は日本に比べてゆっくりではありますが増加しています。IT

によるデジタルギャップはありますが、20世紀に存在した世界の格差は、より簡単にしかも速く縮まっていくでしょう。

アルビン 私が日本に来て感じたのは、カルチャーショックではなくてITショックとでもいうべきものでした。私は日本に対してあらゆる面でとて



も進歩しているだろうと想像していたのです。しかし、最も進んでいるはずの日本でのATMは夕方になると閉まってしまい、クレジットカードはどこでも使えるとは限りません。まだまだ現金社会です。アパートに入居する時も契約などはすべて非合理的に書面で行われます。

椎名 よく観察していますね。あなたの疑問に答えさせてください。まず、日本人には団結する性質があります。シンガポールなど他の国と比べると、日本では会社間を人が移動することはそう多くありません。それで情報は頭の中だけに保たれるわけです。機械で仕事を管理する必要はありません。ITを用いるということに関して言えば、日本は遅れていると言えるでしょう。次の理由は、労働条件の問題です。もし、365日24時間機械を働かせることになれば、結局は人間が機械を管理しないといけなくなります。日本では、労働時間が法律で厳しく規制されています。例えばATMであれば24時間その機械を管理する必要がでてくるのです。誰も夜中に働きたいとは思いません。3つめは、一般的に言ってIT技術の使用は限られています。日本の企業の製造現場に行けばわかると思いますが、ロボットが活躍しており他の国よりずっと進んでいると思います。また業務時間中のATMは非常に進んでいます。つまり肉体労働的なことはここ30~40年間にオートメーション化が進んでいますが、頭脳面での機械への転換はまだまだということです。電話料金が高く他の国と比べてサービスが遅いといったことも、コンピューター利用の普及を妨げているのです。

学生時代に 問題解決能力を高める

大山 これからAPUという環境のなかで何をしておくべきだとお考えですか。また日本企業と外

資系企業とでは、就職に向けて学生時代にやっておかねばならないことが違うのでしょうか。

椎名 なるほど。非常にいい質問だと思います。1番目の質問ですが、答えは簡単です。やはり基本が大切です。若いうちは基本を忘れて、華やかに見える応用の方にすぐに行きたがります。例えば、巨人の松井選手やゴルフの青木さんやジャンボ尾崎さんでもそうですが、彼らは若い頃に徹底的に体を鍛えたんだと思うんですね。まず体を鍛えないといいスイングができない。ピカソもいい例だと思います。彼の若い頃のデッサンはすごい。非常にまじめにいろいろなものをスケッチしているんです。だからこそああいふ抽象画が生まれてくるんですね。大学教育でも基礎を徹底的にやらないと何をしてもうまくいきません。

2番目の質問ですが、これからは外資系企業であろうが日本企業であろうが関係なくなってきました。あなた方が卒業する頃にはその違いも今ほどではないでしょう。どんどん変わっていますよ。今まで外資系企業は、IBMもそうですが、入社した人をすぐに使えるように一生懸命教育しながら実務をさせたんですね。日本企業の場合は、はしごを上るような年功序列式でしたが、それも今では急速になくなりつつあります。そうすると、やはりクリエイティブな問題解決ができるかどうか、今問題を与えられたらどうするか、それが勝負どころです。

20世紀はアメリカやヨーロッパの先進国がモデルとなっていました。それに追いつくことが我々の目標だったのです。例えると線路が敷かれていたのが20世紀だったのです。これからは線路をどこに敷くべきか決まっています。自分で敷かなくてはならないのです。APUで言われているような「自分で考えなさい、自分で問題解決しなさい」というタイプの人しか生き残れないということになります。

将来の目標を実現する チャレンジ精神

司会 では最後に、学生の皆さんに将来の目標やAPUで何を学んでいきたいかを具体的に話してもらいましょう。椎名さんにはアドバイスをいただきたいと思います。

大山 外国にしばらく住んだ経験は、初めて自分の国について考えるチャンスになったので、今は親に感謝しています。海外に渡った当時、義務教育レベルのことしか日本について知らず、外国の人たちに自分の国を説明できるようになりたいと思ったのが日本に帰ってきた理由でもありました。国際的な環境のAPUで、これまで自分が外国

で学んだことも大切にしながら大学生活を送れたらと思っています。

椎名 私の留学経験でも、日本について聞かれることが一番困ったんですね。戦争中の学徒動員で何も勉強していなかったのです。日本の歴史や文化、歌舞伎、生け花、茶道など何も知らなくて恥ずかしい思いをしました。とてもいい機会ですから、これはおもしろそうと思ったら徹底的に勉強してみてもどうですか。日本の歴史はおもしろいですよ。

大山 日本をきちんと知った上で外国を知ることが大事だと痛感しています。

エンゴ 私は、まずコンピューター・ネットワークについての知識を増やしたいと思っています。マレーシアの高校では情報設備を充実させようとしていますが、現在でも私の母校のコンピューター・コースにアクセスすることができない状態です。また、これまでの履修では机上の勉強だけでしたが、これからは今日の懇談会のような機会や、ケーススタディなどの学習を増やしていきたいと思っています。

椎名 APUの設備はおそらく日本の中でも大変進んでいると思いますし、無料で使えるのですからどんどん勉強していただきたい。特に基礎はしっかり学んでください。

アルビン シンガポールではすべてにIT、ITと言われます。基礎的な技術があるだけでは競争が激しいので認められません。その点、日本はまだ発展途上です。現在、アルバイトで情報SA (Student Assistant) をしています。別府市の観光案内所のホームページを作成したりIT関連の翻訳もしました。シンガポールで学んだ基礎を日本で高めていきたいと思います。

椎名 ITは単なる道具です。目的そのものではなく、目的達成のための手段に過ぎないのです。

吉川 大学生活の間でしたいことが2つあります。私は海外に留学した経験もあり、中学・高校と国際学校で学びました。ずっとAPUと似たような環境にいましたので、まずはもっと日本人としてのアイデンティティを持って外国の人たちに接し、いろいろなことを吸収したいと思っています。2つめは、アジア太平洋地域は現在発展しつつありますが環境汚染の問題が起きています。それについて研究したいと思っています。

椎名 その分野は将来たいへん重要になってきます。十数年前は日本でも環境汚染がひどく、飛行機から富士山を見ながら徐々に降下してくると、途中で紫色の雲が見えていたんです。それほど東京の公害はひどかった。今はその現象は見られなくなっています。日本は環境対策に関してもいい技術を持っています。

アウン 一村一品運動は今やフィリピンにも広が

っています。おそらくこういった運動を取り入れることが貧困の解決に役立つと思います。そして同時に日本の高い技術も取り入れることができます。お手本を取り入れてミャンマーの技術の向上を図れたらと思います。

椎名 一村一品運動なら大分にはいいモデルがありますね。大分で各地を回って見ることもいいでしょう。東京にはないことです。いい環境にいらっやいますね。

司会 それでは、締めくくりにあたりまして、椎名さんから学生たちにメッセージをお願いします。

椎名 9年前に現役を離れて最高顧問になった時、IBMの社員の前でこういうスピーチをしました。私はIBMで40年間働き充実した日々を過ごしてきましたが、もし神様が現れて「椎名さん、よく頑張りました。褒美として、さらに40年の人生をあなたにあげましょう。これまで送ってきた40年をもう一度繰り返すのと、新たに別の40年とどちらが欲しいですか」と言ったとします。私の答えは新しい40年の方です。もちろん過去の40年をもう一度繰り返してもいいと思います。今度はこれまでに私がしてきた大きな失敗を避けて通れるでしょう。しかし、私は未知の40年にチャレンジしたいのです。なぜならもっとエキサイティングになるだろうと思うからです。IT技術により、産業が飛躍的發展を遂げるのを見てみたい、これまでとは違う展開をみたいのです。

先ほども言いましたように、将来は全く未知なのです。恐いけれど、チャレンジ精神を持てば新しい境地にたどり着くことができるでしょう。

全員 ありがとうございます。

椎名 あなたたち若い人がうらやましいですね。(全員笑)

(この座談会は2001年3月23日に行なわれました。)

【座談会を終えての感想】

吉川 とても楽しかったです。いろいろとお話を伺い、これからの大学生活のことを考えさせられました。

大山 このような経済界のトップの方に直接お話が聞けたことが、これからの自分の成長にきっと役立つと思います。

アウン 椎名さんにお会いできて誇りに思います。大学生活がよりいっそう充実するようなたくさんのヒントを学びました。

アルビン 東京で椎名さんとお会いできお話を伺えて本当に感動的です。ぜひ後輩にもこのような機会を与えていただきたいです。

エンゴ 今日の懇談会に参加する機会を与えられて、日本で勉強する意味を再認識することができました。



Daily Life

国際色豊かな場で、充実したキャンパスライフ

MONDAY

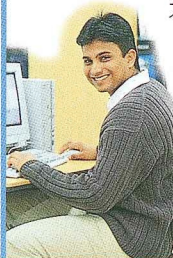
月曜日

メールチェックから一日が始まる

朝10時起床。僕の朝は少し遅く始まる。夜は翌日の授業の準備で忙しい。寝るのはいつも4時頃になるからだ。

まず、Eメールをチェックすることから1日がスタート。APUでは、すべての情報がネット上で確認できる。

午後、メディアセンターで授業の予習。そして、日本語の授業。入学した頃には未知の言葉であった日本語が、今は日常会話には全く不自由しない。早く専門科目の授業を日本語で学べるよう特訓中だ。



TUESDAY

火曜日

終日授業、夜の食事は僕が作る



今日は、授業が4コマある日。少し早起きした。午前は、基礎教育科目。午後は、コンピューターの授業などを受講。自分のホームページの作成も行った。自分では良く出来たつもりだったが、学内コンクールの入賞には届かず残念。

夕食は、APハウスの住んでいるスリランカからの学生5名で当番を決めて作っている。今日の当番は僕。みんなより日本語がうまい僕は、彼らの日本語教師でもある。

WEDNESDAY

水曜日

ゼミナールで議論白熱

午前中は授業。「アジア太平洋地域理解」の授業はゼミナール形式だ。今日は、別のグループのメンバーがプレゼンテーションを行なった。フロアから鋭い質問が飛び、議論は白熱した。来週は僕達のグループの発表だ。すでに準備をしてはいるが、発表までに1週間、ますます忙しくなりそうだ。

午後は、フリーの時間。いつもはメディアセンターでコンピューターを使っているが、今週からはもう少し活動を開始するクリケットサークルのミーティングをした。日本でもクリケットが盛んになることを期待している。



PERERA, Sumudu M.C.

ペレラ・スムドゥー

APM 2回生
スリランカ出身



THURSDAY

木曜日

経営学と日本語をみっちり勉強、そしてアルバイトへ

久しぶりにゆったりとした朝。APハウスで洗濯や掃除をしたり、音楽を聴いて午前中を過ごす。午後は、経営学の授業。将来起業家を目指す僕にとっては、最も興味ある授業のうちのひとつだ。そして日本語の授業。そのあと急いでアルバイトに出かける。職場はAPU内のカフェテリア。週に3日くらいのペース。なによりも勉強に時間を割きたい僕にとっては、APハウスから近いアルバイト先は大助かりだ。



FRIDAY

金曜日

徹夜の甲斐あって、日本語テストをクリア

昨晩は、今日の日本語のテストの準備と宿題のレポート作成が重なって、眠ったのは空が明るくなる頃だった。メディアセンターで自習をしてから、カフェテリアで昼食をとった。見晴らしいのカフェテリアからの眺めは気分をリフレッシュさせてくれる。

午後は日本語のテストがあった。がんばった甲斐あって、満足のいく解答ができた。授業が終わってからは、別府市内で会社員のお宅に出向き、英語を教えるアルバイト。授業のあとのご家族との雑談の時間も楽しみのひとつだ。



SATURDAY

土曜日

APハウスでミニパーティ

土曜日は、半日はカフェテリアでのアルバイト、そして半日は勉強というのが、ほぼ決まったパターン。APUの授業では、予習は勿論、復習も欠かせない。他の学生達も頑張っているから、僕も負けてはいられない。夕食は、APハウスの同じフロアの韓国やマレーシアやインドネシアの学生達と各国の料理を持ち寄ってのミニパーティ。APハウスは、国際交流のつぼだ。



SUNDAY

日曜日

地元のお祭りに参加、夜は次週の予習

APUの学生、特に国際学生は別府市民の方々からいろんな行事にご招待いただくことが多い。今日は、「扇山まつり」に国際学生20名とともに参加。日本の文化に触れるとともに、市民の方々の温かいおもてなしに感激した。来週は、市内のホスト・ファミリーのお宅に1泊2日でホームステイする予定だ。日本の父母ができると思うと楽しみだ。夜はAPハウスに戻って、来週の授業の準備。日曜日の夜は「漢字」も集中して勉強することになっている。どうにか目標にしていたところまでやり遂げてベッドに入った。



	1限 (8:45~10:20)	2限 (10:35~12:10)	3限 (12:25~14:00)	4限 (14:15~15:50)	5限 (16:05~17:40)	
月		Eメールをチェック		メディアセンターで自習	日本語	コンピューターの自習
火	伝統と社会	国際社会と平和	Eメールをチェック	コンピューター	学修技法	自習
水	アジア太平洋地域理解	日本語		クリケットサークルのミーティング		
木			自習	経営学	日本語	テスト準備レポート
金		メディアセンターで自習		日本語のテスト	日本語	アルバイトで英語を教える
土		アルバイト		コンピューターの自習	アルバイト	自習
日		アルバイト		コンピューターの自習	アルバイト	自習

国際学生と国内学生が日常的に交流するキャンパスでの授業やサークル活動はもちろん、APハウスでのプライベートライフや、地域住民の方との交流なども国際的な環境のもとで展開しています。RAやSAなどのアシスタント制度が充実している点も、APU学生の生活を居心地のよいものにしています。

●●● APU学生の1週間

APU Students

	1限 (8:45~10:20)	2限 (10:35~12:10)	3限 (12:25~14:00)	4限 (14:15~15:50)	5限 (16:05~17:40)	
月	スペイン語		学生会立ち上げのための津・朝顔委員会ミーティング		ライブラリーで自習	
火	APの伝統と社会	国際社会と平和	RA定例ミーティング	スペイン語	先生とのコミュニケーションタイム	夜の巡回当番
水	英語Ⅱ	アジア太平洋地域理解	スペイン語		大学主催の講演会に参加	
木		メディアセンターで自習	生協ミーティング	英語Ⅱ	社会学	ベトナム料理に挑戦
金	スペイン語		学生会ミーティング	英語Ⅱ		
土		市内で買い物				
日				アジア太平洋地域理解ミーティング		別府クリスマス花火ファンタジア



MONDAY

月曜日

1週間はスペイン語の授業から

秋 semester から、英語に加えてもうひとつ外国語を受講することになった。スペイン語は、APUでも人気の言語だ。私は16歳から1年間チリに留学していたので、日常会話には困らないけれど、もう一段高いレベルを目指して勉強中。アルタミラノ先生の授業は、陽気な先生の性格もあって非常にユニークで、理解しやすい。授業



が終わったあとのコミュニケーションタイムがいつも楽しみ。あと1年くらいみっちり勉強してスピーチコンテストに出ることが当面の目標。

TUESDAY

火曜日

お昼にRA(レジデントアシスタント)ミーティング

午前中に2コマの授業。お昼は、急いで昼食をとりRAとスチューデント・オフィスとの定例会議。私は、国際学生とともにAPハウスで生活し、さまざまな面でサポートを行うRAを務めている。担当はイースト2階のフロア。韓国、中国、インドネシア、スリランカ、ブルガリアなどの学生40名。世界各国からの学生達の生活の場・APハウスでは、さまざまな問題が噴出。ごみの捨て方ひとつにしても相当な議論を要する。それでも毎日が緊急ミーティングだった最初の頃から比べると、APハウスでの生活も随分落ち着いた。今日の夜は週に1回の夜の巡回の当番をこなした。



WEDNESDAY

水曜日

ハードな英語の授業、午後は講演会に

朝から続けて3コマの授業。1限目は英語。1週間に4回、いろんな形式でおこなわれる英語の授業は、課題も多く準備に相当の時間がかかる。昨晩も結構大変だった。水曜日の午後は、授業は設定されていない。大学や学生が主催する講演会等の企画が多く、今日も参加した。日頃なかなか聞くことのできない企業のトップの方や現場の最前線の方のお話が聞ける貴重な機会だ。講演後のアンケートには、今度は活躍されている女性の話を聞きたいと書いておいた。

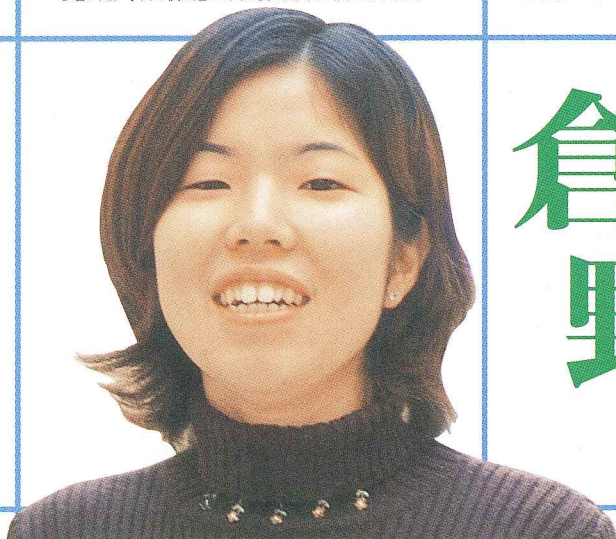


THURSDAY

木曜日

メディアセンターで自習のあとは、ミーティングそして授業

授業のなかった午前中は、メディアセンターで自習。パソコンルームは、いつ来ても多くの学生がいる。随分パソコンにもなれたが、わからないことはSA(スチューデント・アシスタント)の学生達が相談にのってくれるので助かる。お昼時間は、生協委員ミーティング。RAをやっていく中で関心が強まったゴミやリサイクル・環境問題について、今後取り組んでいってはどうかと提案した。午後には2コマの授業を終えて、APハウスへ。夕食は、いつも通り親友とクッキング。今日は、ベトナムからの学生に教えてもらった春巻を使った料理に挑戦した。



倉田 野依

KURATA Noe
APS 2回生
東京都立豊多摩高校出身

FRIDAY

金曜日

語学の授業をみっちり、夜は日本語講師に

1回生のうちはやはり語学の授業が多い。今日も英語とスペイン語。少し苦手だった英語も、授業とキャンパスでの日常のコミュニケーションで随分上達したと思う。授業の合間には、今学生の間で準備している「学生会」のミーティングに参加した。今日は12名が参加。他の自主活動に比べて国際学生が多いことが特徴といえる。学生の意見をまとめて、大学づくりに活かしていこうというのが「学生会」の趣旨である。第1期生の私たちに、自分達で大学をつくっていくという雰囲気がある。そんなところが私は気に入っている。



夜はスペインからきている短期留学生に日本語を教える。上達が早くてやりがいがある。

SATURDAY

土曜日

ゼミナール授業に向けてグループ討議を重ねる

休日の日課は、やはり掃除・洗濯。そして、市内に出て買い物も済ませる。午後は、「アジア太平洋地域理解」というゼミナール形式の授業で行なうグループ発表に向けての準備に費やした。今回のテーマは、「アジア太平洋と人権」。前回の発表の時には、質問に対して答えられなくて悔しい思いをしたが、今回は準備万全。2週間後の発表が待ち遠しい。



SUNDAY

日曜日

「Dikir Barat」で晴れ舞台にたつ

今夜は、「別府クリスマス花火ファンタジア」。花火のほかにもステージでの催しがあり、これには京都の立命館大学のチアリーダー部や軽音楽部も参加、APUからはダンス・パフォーマンスで出場。この2週間、少しずつ時間を割いて練習をしてきた「Dikir Barat」という東南アジアのダンスだ。本番は約90名のAPUの学生が舞台上に上って大盛況。市民の方々に喜んでもらえたのがうれしかった。



Education

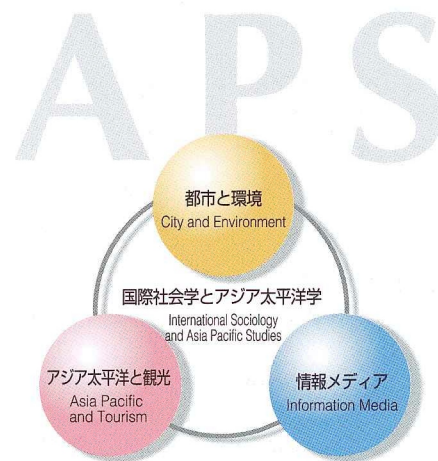
国際社会のリーダーを、体系的で育成

アジア太平洋学部 College of Asia Pacific Studies

アジア太平洋の社会が「どうあるべきか」を考える。
それがアジア太平洋学部（APS）の目的です。

APSが掲げる「アジア太平洋学」は21世紀の世界をリードするといわれるアジア太平洋地域を研究対象とする新しい学問分野です。それは現実のアジア太平洋の社会を深く理解し、分析するにとどまらず、将来のアジア太平洋が「どのような社会を目指すべきなのか」を展望する学問でもあります。これはアジア太平洋の「未来学」ともいえます。それはアジア太平洋が抱える諸問題の解決策を提示するとともに、アジア太平洋が持つ可能性を引き出し、発展させる方向性を提言する、ダイナミックで刺激的な学問分野なのです。

アジア太平洋地域はもちろん、世界中から学生と教員が集まるAPUだからこそ追求できる、そしてやがてAPUから世界へと巣立っていく学生たちだからこそ実現できる「21世紀のアジア太平洋ビジョン」を構築すること——これがAPSでの教育・研究の目標なのです。



卒業研究

専門分野の科目の履修を通じてアジア太平洋社会学における専門知識をさらに深め、こうした知識と4年間の学習のなかで育んだ実践的な知識・技能を総合し、学生生活の集大成となる学習活動を展開していきます。

アジア太平洋社会学科目

アジア太平洋社会学論
海域ネットワーク論
欧米社会とアジア太平洋

分野科目

都市社会学
環境経済論
アジア太平洋観光論
観光開発と計画
情報メディア論
情報ネットワーク論

リサーチプロジェクト

アジア太平洋地域の社会に関する科目と、都市と環境・観光・情報メディアの3分野の科目を中心に学びます。国内外でのフィールドワークや、企業および自治体におけるインターンシップ（就業体験）など、アクティブな学習が展開されます。

社会学および国際社会学科目

社会変動論
比較価値意識論
多文化社会論
国際社会ネットワーク論

調査・研究入門

言語教育のさらなる進展とともに、「社会学」や「国際社会学」に関する専門科目の本格的な履修がスタート。海外の大学や研究機関などへの長短期留学、また立命館大学への国内留学がスタートするのもこの時期です。



基礎教育科目

アジア太平洋と人権
アジア太平洋の政治・経済
日本の文学と文化
社会と法
現代の科学技術
情報処理論 I

言語教育科目

英語 I・II・III
日本語 I・II・III
中国語 I・II・III・IV
スペイン語 I・II・III
タイ語 I・II・III

アジア太平洋地域理解（社会）

APUでの学習を進める上で不可欠となる高度な言語運用能力の修得をめざします。またアジア太平洋の多様性を理解し、この地域をフィールドとして学ぶための幅広い分野の知識を身につけます。

演習科目

民族や文化の問題に取り組むたくて、
国際社会学をベースに学ぼうと決めました。

高村 英幸

APS 2年生

奈良県立富雄高校出身



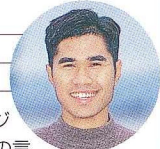
将来の夢は国連などの国際機関で働くことです。民族紛争や文化摩擦などの問題に関心があり、その解決に携わりたいと考え、国際社会学を柱としたこの学部を選びました。異なる価値観や文化を持つ人間が、共通の課題に向かい、協力し合わねばならない時代だと思います。学生の約半数が国際学生というAPUの恵まれた環境のなかで、将来のために必要な素養を身につけたいと考えています。また、新設大学の1期生ということで、学生自身が積極的に大学づくりに関わっていいところもAPUの大きな魅力だと思います。

21世紀における中国の発展の可能性を、
多様な側面から追究したい。

YUSUF, Yulizar

APS 2年生

インドネシア出身



昨年のゼミナールでは、アジア太平洋地域には極めて多くの言語や民族が存在することを知ることができ、もっと幅広い知識を身につけたいという意欲がわきました。僕は東ティモールの問題などをテーマに取り上げてプレゼンテーションしました。

また、中国の発展性にも注目しています。中国語や中国の歴史、華僑などについても研究する予定です。政治や経済の違いはもちろん、幅広い側面から日本と中国を比較し、今後の発展の方向性を探りたいと考えています。

r the Future

アジア太平洋マネジメント学部 College of Asia Pacific Management

新しい時代の社会と企業をいかに管理運営するか…。それがアジア太平洋マネジメント学部（APM）のテーマです。

APSがアジア太平洋の未来像を描く学部であるとするれば、APMはその新しいアジア太平洋の社会と企業を具体的に運営（マネジメント）していく方向性・手法を学ぶ学部です。21世紀の社会、そして企業や諸機関では、ヒトやモノや資本だけでなく、情報や技術、知識といった諸要素が複雑にからみあいながら国際規模で動いています。そこで求められるマネジメント手法は、それぞれの社会、企業、諸機関の目標に合致するだけでなく、世界各国・地域の社会背景や文化、法律や社会的ルールに適したものである必要があります。

そのためAPMでは国際企業や国際機関の事例を中心にケーススタディを徹底的に積み上げ、多文化・多言語・多民族のアジア太平洋で通用する新しいマネジメントの手法を習得していきます。APMで学んだ人材は、国際企業はもちろん、アジア太平洋の未来社会を創造する国際機関やNGO/NPO、ジャーナリズムや研究機関といった広範な分野での活躍することが期待されます。



卒業研究

4年間のトータルな授業で身につけた実践的な問題解決能力を、専門知識と融合し、アジア太平洋マネジメントの学習を最終段階へ進めます。学習生活のまとめとなる卒業論文を作成し、その成果を社会へ発信します。

日中韓比較経営
アジア太平洋における日本企業
アジアの市場

アジア太平洋社会学科目

ケーススタディ

国内外のビジネスの現実を理解したり、実際のビジネスの最前線を体験するインターンシップ（企業などでの就業体験）も積極的に展開。専門科目の履修も進め、アジア太平洋地域における企業マネジメントへの考察を深めていきます。

国際マネジメント学科目

国際経営論
国際金融論
国際比較会計論

マネジメント学科目

経営学
財務管理論
マーケティング論
技術開発論
消費者行動論

企業研究入門

企業マネジメントに関する専門分野の本格的な学習がスタートします。また少人数制の演習（ゼミナール）等から企業分析の手法を身につけるとともに、言語能力をさらにブラッシュアップ。国内外への留学もはじまります。

基礎教育科目

アジア太平洋と人権
アジア太平洋の政治・経済
日本の文学と文化
社会と法
現代の科学技術
情報処理論 I

言語教育科目

英語 I・II・III
日本語 I・II・III
中国語 I・II・III・IV
スペイン語 I・II・III
タイ語 I・II・III

アジア太平洋地域理解（企業）

高度な言語教育を通じてAPUならではの授業に対応できる実践的な言語能力を育成。また学習活動に不可欠な情報関連分野の基礎を修得します。さらにアジア太平洋地域の特徴を、多彩な科目を通して学びます。

演習科目



学ぶためにAPUにきた、
納得のいくまで勉強します。

KIM Su Il

APM 2回生

韓国出身



経営学を学びたいと思っていた私の希望通りのカリキュラムがAPUには用意されていました。入学して1年間は、専門科目は少なかったのですが、その中でも「経営学」の授業は、興味深いものでした。日本語での授業に随分苦労しましたが、各国の企業経営の基本についての理解は深まりました。

今後は、金融・会計学・人材マネジメント・財務会計などを中心に学んでいきたいと思っています。また今春には、「金融研究会」というサークルも立ち上げる予定です。

APUには、学ぶための枠組みは充分に用意されています。その中で自分がいかに頑張れるかが問われていると思います。

日本の経済システムについてディスカッション。
まず自分の国を理解することの大切さを実感。

吉田 友紀子

APM 2回生

香川県立丸亀高校出身



一番興味があるのは、アジア太平洋地域理解のゼミナールです。

少人数なので、じっくり意見交換できる点がうれしいです。生まれ育った環境、歴史的背景や文化が異なるので、持っている価値観もまさに十人十色です。日本の経済についての議論では、日本人学生として、自国の経済の成り立ちや指針を正確に理解したうえで、オリジナリティのある発言をしていきたいと準備に懸命でした。

学生と教員の約半数が外国籍という、日本にいないがに多様な価値観や文化に触れることのできるAPUならではの環境を大いに生かしていきたいと思っています。



アジア太平洋地域理解(企業)

●授業レポート

APUでは、大学の理念を学生一人ひとりの中に根付かせ、国際社会で活躍しうる学生を育てるため、1回生時から、学生構成・教員構成における国際的環境を異文化間コミュニケーションやアジア太平洋地域の理解に結び付けていくことを重視しています。

そのために、1回生から4回生まで一貫して少人数制演習(ゼミナール)を設けており、その中心となる科目が1回生では「アジア太平洋地域理解」の授業です。

APUへの留学は、 私に新たな未来を与えてくれた

私は、タイの高校を優秀な成績で卒業し、タイ国王子妃から王室奨学金をいただくという栄誉を受けました。日本で経営について学ぶことを熱望していた時に、APUの存在を知りました。学費や生活費のことを考えると、日本への留学は「夢」に終わってしまうところでしたが、光栄なことにAPUで奨学金を受給することができ、私に新たな未来が開けました。

私は、マネジメント、なかでもマーケティングに重点を置いて勉強していきたいと考えています。その理由は、ビジネスの世界で仕事することが将来の希望であり、できればマネージャークラスになりたいと思っているからです。マーケティングを勉強するというのは、一番重要な部分であると思います。というのは、それを勉強することによって、今、経済はどういった状況にあるかという情報をいち早く取り入れることができるからです。

52カ国・地域からの学生とともに 「学び方」を学ぶ

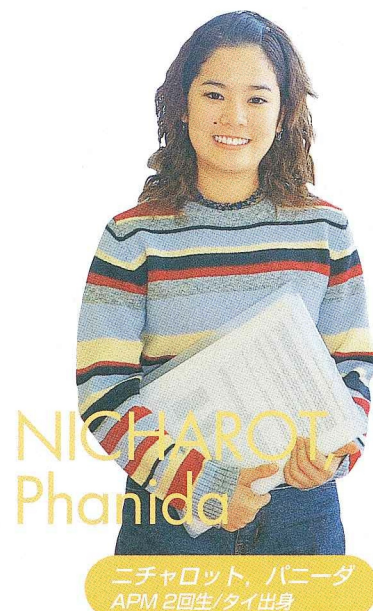
「アジア太平洋地域理解」の授業は、1年間を通じて行われました。春semesterは、高元昭雄先生、秋はZHANG, Wei-Bin先生に学びました。今回は、秋semesterの授業について紹介します。

学生は、国際学生と日本人学生、12名ずつの合計24名、クラスメートはみんな英語が使えたので、基本的に授業は英語で行われました。中国、韓国、イギリス、アメリカ、ポーランド、そしてアフリカからの学生もいました。私自身、日本語は集中的に勉強しており、日常会話はほぼ大丈夫ですが、授業で発表や議論をするにはもう少し時間がかかりそうなので、英語での授業は思っていることを伝えやすいこともあって有意義な時間でした。

秋semesterを担当していただいたZHANG, Wei-Bin先生は、「出身国・地域について紹介する」「自分の言葉で語る」「互いの文化について理解を深める」という三つのアプローチから授業を進められました。

学生はまず、自己紹介もかねてそれぞれ、出身国・地域の政治、経済、文化といった分野からテーマを選び、パワーポイントを使って発表をしました。自分の国のことでも、15分間で、他の国・地域の人にわかるように説明するとすると、準備の過程で認識を新たにすることも数多くありました。書物は勿論ですが、インターネットでの情報収集もかせません。それは、語学の学習にもつながるものです。

また、この授業では、経済や経営の基本的なことを勉強するとともに、勉強の仕方、プレゼンテーションの方法、あるいはレジュメやレポートの作成方法といった基本的なことを身につけるといっても課題にしています。授業を通じては勿論ですが、APUにはいろんな学生がいて、友人同士



ニチャロット・パニーダ
APM 2回生/タイ出身

で勉強の仕方についていろいろなアイデアを出し合い、またそのアイデアを共有することで、一層実践的で有効な学び方が習得できたと思っています。

先生から出されたテーマについて、グループでのプレゼンテーションも行いました。中国・韓国・シンガポール・日本などの国について、それぞれの国が果たしている役割、また本来の役割を果たしていない理由を各グループで発表するというものです。

具体的に取り上げる事象は、それぞれに任せられました。外国企業の進出や技術革新等の側面から21世紀における中国・北京の発展性を検証したものや、日本の行政システム構造や「省庁再編」などを取り上げたものもありました。ひとつの国の状況についての報告がされると、クラスにはいろいろな国の学生がいますので、その国との違いなどに話が及び他の国々についても同時に学べるというおもしろさがあります。

私たちのグループは、日本経済についてプレゼンテーションを行いました。第二次世界大戦後の高度成長期に焦点をあて、何が日本に高度成長を

「アジア太平洋地域理解」では、

- ① 国際学生と国内学生がともに学びあうなかで相互の理解を図ること、
 - ② アジア太平洋学部では「アジア太平洋地域における社会」について、アジア太平洋マネジメント学部では「アジア太平洋地域における企業」についてのトピックを学び、アジア太平洋地域への関心を高め、基礎的な知識を身に付けること、
 - ③ 調査・分析・レポート作成・発表・討論など大学での学習技法を身に付けること、
- 共通のテーマは設定していますが、各クラスの担当教員がそれぞれ創意工夫をこらした授業を行っています。



もたらしたのか、そして日本経済の将来をテーマに選びました。

先生の専門分野の一つでもある、さまざまな経済的变化が社会にもたらした影響について考察し、儒教などの思想や哲学が経済成長をいかに左右してきたのかなどについても触れながらの授業は、欧米からきた学生にとっても興味深いものであったようです。

白熱したディスカッションから 新しいアイデアが生まれる

発表後の質疑はいつも活発です。オリジナリティのある内容の場合は、一層拍車がかかります。国際学生は本当によく発言するので、初めは比較のおとなしかった日本人学生もだんだん触発されて、全体がにぎやかになっていきました。

いろいろな国からの学生が大勢いてよかったと

思う点は、性格や態度、姿勢、考え方などにおいて、さまざまな視点を持った人と触れあえるということです。複視点を組み合わせて考えるなかで、一番いいアイデアを生み出せるといった利点があると思います。いろいろな国からの学生と話していると、それぞれ視点が違いますし、問題の解決方法も、その国々によって、また人によって大きく違います。そういったアイデアを1つにしていくという醍醐味を味わえるのが、「アジア太平洋地域理解」の授業なのです。

ZHANG, Wei-Bin先生は、「まず的確な情報を効率的に収集してまとめ、自分の言葉で説明する能力を養うことが大切です。それからそれぞれの問題を分析し、解決のための具体策を見出す能力を身につけて欲しい」と、いつも私たちにおっしゃっていました。

この授業を通して、少しはその目標に近づけたのではないかと思います。



ZHANG, Wei-Bin先生が見た
ニチャロットさん

「非常にアクティブな学生」というのが印象です。授業のなかでもよく質問もしますし、勉強のみならず

総合的に非常に優秀な学生です。私が今回の授業を進めるにあたっても、キーとなる学生でした。

日本への留学を熱望していたこともあって、他の国際学生と比べて日本に関する知識も豊富です。幼少の頃からいろんな国に住んだ経験があると聞いていますが、それが異文化間のコミュニケーション能力を高めたようです。

グループでのプレゼンテーションを見ても、彼女のリーダーシップが非常に良く表れていました。彼女自身の希望でもある「経営」に関しても、優れた才能を感じさせます。これからも夢が叶うよう応援していきたいと思っています。

▶ 授業レポート

情報処理論 I (英語)

情報処理の基本であるプログラミング能力を身につけ、
多様な分野の研究に活用する。

GUNARTO先生が担当する「情報処理論 I」は、ワープロや表計算、プレゼンテーションといったソフトウェアを支障なく活用できる能力を身につけた学生が、さらに高度なデータ処理の技法を身につけていくための授業です。学生は主に、設定した課題に対して必要なデータを収集して解析し、それらを加工してより効果的な形で提示する方法について学びます。

この日の授業では、「Visual Basic」というプログラミング言語を用い、簡単な画面処理を体験すると共に、プログラミングの概念について学びました。まず先生がプログラミングのメカニズムについて構造的な説明をおこない、全体の情報の流れや、「オブジェクト」「関数」など、プログラムの各段階における重要な要素について解説しました。

先生は、「情報科学入門でコンピュータの操作をひと通り覚えたら、次のステップではそうした情報処理のスキルをさらに発展させ、そうした技術がなぜ必要なのか、どのような形で活用していけるのかということを考えます」と語ります。多数の練習問題をこなして実践的なノウハウを身につけた学生は、次年度以降に「情報処理論 II」

の授業で、統計データなどの処理をはじめとする、高度な問題解析能力を発展させていきます。こうした技術を習得することで、あらゆる専門分野において高度かつ幅広い研究活動を効率的におこなっていくことができるようになります。



パソコンを使えなくては、
APUでは何もできない
というのが実感です。



SANTOSO, Edy
サントソ エディ APS 2回生/インドネシア出身

入学当時は本当に初心者でしたが、日々の学生生活での必要に迫られながら着実に情報処理能力を身につけることができました。「情報科学入門」で基礎を学び、「情報処理論 I」では少し難しい課題にも挑戦しています。

現在は、情報SA（スチューデント・アシスタント）として、情報処理関連の授業で先生の補助的役割を果たすこと、マルチメディアルームに常駐して学生の質問に答えることなどの仕事も担当しています。

1回生の第1セメスターの授業で 全員がホームページを作成

1回生の第1セメスターに「情報科学入門」の授業を必須科目として設けています。ここではワープロソフトや表計算ソフトの使い方、またインターネットの利用方法などの情報処理分野を初歩から学び、最終的には学生一人ひとりが各自のホームページを作成します。学生が作成したホームページはAPUのホームページからリンクしていますので、ぜひ一度アクセスしてください。

<http://www.apu.ac.jp/ct/directory/student.html>



英語

〈英語「で」学ぶカリキュラムで、高度な言語運用能力を確実に身につける〉

●授業レポート

English

APUの英語教育は「コンテンツベース教育」という教授法理論に基づいておこなわれます。

これは英語の習得だけが目的ではなく、学術科目を英語で学び、

知的な内容（コンテンツ）への理解と同時に高度な英語の運用能力を育むという考え方です。

1回生から2回生にかけては集中的に言語教育科目を履修して英語運用能力を高めながら、

徐々に英語で開講される学術科目のウェイトを高くしていきます。



自分が伸ばしたい能力 を伸ばせる授業

入学当時英検2級を持っていた私は、春セメスターは英語Ⅰの履修を免除され、英語Ⅱからスタート、秋セメスターでは英語Ⅲを履修しました。ここでは、英語Ⅲの授業についてレポートします。

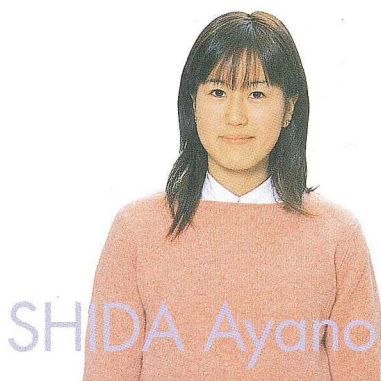
先生は、授業を開始するにあたって、私たちに何がしたいのかを聞いてくださいました。伸ばしたい力というものが学生それぞれにより異なることを配慮し、得意とする方法でその力を伸ばせるよう、クラスがグループに分けられました。リーディングとライティングのグループがあり、私はライティングを選択しました。英文雑誌や新聞記事を教材に使用し、役に立つ表現・言い回しを徹底的に学びます。難しい語彙・表現を使った文をできるだけやさしい表現で言い換えをおこなったり、「APUで学んだこと」について今まで習ってきた単語をできるだけ多く利用してレポートを書くなど、重要な表現や語彙を使う練習をしました。語彙力のなさを実感することも度々ある大変な授業でしたが、そんな中で語彙力は勿論、理解力や記憶力も格段に向上したと思います。APUの環境のおかげで、日常の生活の中でも、ネイティブの友達にチェックしてもらったりできることも大きなプラスになりました。



ハードな学習が 私に自信をくれた

グループで行うプレゼンテーションも経験しました。もちろん英語で行ないます。「方法がどうであれ、オーディエンスを惹きつけるということがいちばん大事だ。話し終わったらあとに、だれも下を向いたり、眠ったりしてはいないほしい」と先生からは助言がありました。

まず、トピックが先生から与えられます。たとえば、第1回目は「男と女のどちらが得か」でした。それについて各グループがリサーチをして発表するのですが、図書館で調べるだけでなく、いろいろな人にインタビューも行います。発表はパワーポイントを使用するところもあれば、撮影し



志田 彩乃

APS 2回生/北海道 北星学園女子高校出身

たものをビデオに編集するグループ、演劇で表現するグループもありました。

私のクラスには韓国やベトナムからの学生もいましたし、世界各国に留学経験のある日本人学生も数多くいました。プレゼンテーションのあとのディスカッションは、国によって大きく考え方が違うことが実感できるものでした。また、プレゼンテーションを行うことで、意志を伝えることこそが、本来あるべきコミュニケーションの姿だということも知ることができました。

この授業では予習・復習は必須でした。「授業はあくまでも自分がしてきたことの確認の場である」と、先生がいつもおっしゃっていました。それを実践することによって、自信を得ることができたと思っています。

また、APUでは英語以外の授業においても英語でレポートを書く機会が頻繁で、そのためには英語の文献を相当数読んで調べる必要があります。そうしていくことの積み重ねが力になっていくのだと実感できました。九州アジア大学といって九州全体の中から大学生が集まるイベントに参加した際には、将来の日本経済に関する英語で書いたレポートを持参しました。「1回生なのにこんなのが書けて、すごいね」と他の大学の人から言われたことも励みになりました。



ビジネスで使える 英語力をめざして

この2月には、APUの協定大学のひとつであるハワイ大学に約1カ月間短期語学留学してきました。会話中心のプログラムだったのですが、文法を勉強したいと希望を申し出ると柔軟に対応していただいてライティングやレポートの書き方なども指導していただきました。ハワイにいったときにテレビニュースなどを見て入ると、APUの授業で習った表現や単語が頻繁に出てきてうれしかったです。

海外で働くことが夢なので、卒業までにビジネスで使える英語が話せて書けるようになりたいと思います。そのためにも、APUで多様に用意されているカリキュラムを有効に活かし、今後はメディア英語・ビジネス英語・通訳英語を学んでいく予定です。

APUの言語教育の特色

特色1 アジア太平洋地域のさまざまな言語を基礎から段階的に学習できます。

APUでは、日本語や英語以外に、中国語、韓国語、マレー語、インドネシア語、スペイン語、タイ語、ベトナム語を基礎から学ぶことができるカリキュラムを設けています。

特色2 高度な英語力を習得するための、英語による学術科目の開講。

APUでは、英語と日本語の2言語による教育を行っています。1・2回生では、英語と日本語の両方の言語で開講、3回生になると、学術科目が「英語のみ」「日本語のみ」で開講されるので、どちらでも授業を受けることができる能力をつける必要があります。

特色3 わかりやすい英語の授業から、学術科目の履修をスタート。

英語による学術科目の授業を受ける前段階として、英語運用能力が今一歩の学生のために、わかりやすい英語で授業を行うシュルター・コースも設置しています。

特色4 1週間かけて予習・復習を繰り返し、英語による学術科目をスムーズに理解。

APUでは、英語による学術科目と言語教育科目を連動させて学ぶ教育システム（アジャクストモデル）を採用しています。例えば火曜日の午後に英語による学術科目の授業を受ける場合は、火曜日の午前中の言語教育科目で予習を行い、木・金・月（翌週）は復習やディスカッションを行います。



日本語

〈日本語の一貫教育プログラムがAPUにはあります〉

「日本語という言葉をはじめて本格的に学ぶ学生の言語能力が、日本語による大学授業を理解できるレベルに到達すること」を目標に、APUでは日本語の一貫教育プログラムを整えています。

正課授業では、「学術目的の言語習得」に重点をおき、2年間で日常生活に必要とされる日本語に加え、大学で必要とされる学術日本語まで学ぶことになっています。

そのためにAPUでは、専門教育科目と連携した内容の独自のテキストを開発し使用しています。

日本語が話せない学生でも入学できるのがAPU

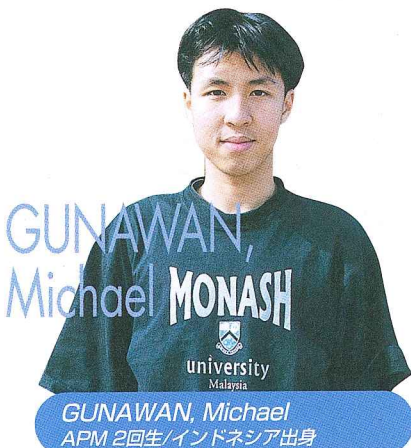
日本の大学ではこれまで、日本語上級者の留学生を入学させるというのが通例でした。大学入学時点での高い日本語能力を求めるため、母国の高校を卒業した後、一定の日本語学習期間を持たな



い限り、日本の大学へ留学することは非常に困難なことでした。APUでは、留学の壁のひとつとなっていた「入学時の日本語能力」という高いハードルを取り除き、英語での受験を可能としました。私も英語基準で入学が許可されたのです。

独自の日本語教育テキストで大いに学ぶ

APUに入学を決めてから、インドネシアの日本



語学校で週に2回、約8カ月間勉強しました。私にとっての最初の日本語学習であり、ひらがなと少し漢字を交えて書く・話す・聞くというレベルまで進みました。それでも入学した頃は、ほとんど日本語が聞き取れませんでした。他の学生と比べても遅れていることを痛感し、少し焦りました。

最初に学んだ「日本語Ⅱ」の授業では、APUで独自に開発されたテキストが教材でした。14のテーマがあり、各課に「読む」「聞く」「話す」「書く」の四技能すべてを網羅した練習課題が入ったものです。日本語能力を伸ばしながら、日本人学生なら高校までに勉強している内容、また大学1・2回生の教養課程で学ぶ内容を学習できるように考えられたものであり、社会科学系の専門科目を学ぶ際に必要となる背景的な知識、専門語彙も豊富に収められたものでした。教科書がぼろぼろになるまで繰り返し学ぶうちに、みるみる日本語能力が向上していくことが実感できました。

日々の学習で日本語1級レベルに到達

語学の勉強には日々の積み重ねが重要です。キャンパスでの日本人学生の会話を聞いて頻繁に使う表現や文法を覚えたり、手紙の書き方を習ったりして勉強を続けました。いつも電子辞書を持ち歩いていますし、引いた単語はノートに漢字で書き、その横にひらがなと意味を英語とインドネシア語の両方で書きます。本を読むことや、漢字の勉強も続けました。先生のおっしゃることが理解できるようになるためには、テレビを見ることも必要だと思うようになりました。ニュースは、文法的にはわかりやすいのですが、政治のニュースなどでは特に専門用語が多く使われているので、まだ難しいです。でも、新聞を読むことはもう大丈夫です。



山本富美子先生が見たマイケルくん

私が作った日本語教育テキストの内容は、大学生としての知的欲求を満たすことを考えてあります。彼は、

来日前の日本語学習量はクラスでも少ないほうでしたが、知的好奇心に支えられたモチベーションが非常に高い学生でした。ですから、このテキストの内容を理解するにはどれだけの言語スキルが必要であるかが理解でき、それに見合った学習を主体的に継続しました。睡眠時間を削ってまでの頑張りには頭の下がる思いでした。

彼の言語の学び方とその上達は、他の学生への大きな刺激でした。また、彼はこのテキストの有効性の「証人」として、私までもを励ましてくれました。

日本語で、政治・社会・経済についてのディスカッションが自由自在にできるようになるのも間近です。

この1年間の学習の甲斐あって、日本語レベルは3級から一挙に1級にまで上がりました。まずは、今の自分の英語力と同程度の日本語力をつけたいです。

卒業後は、まだはっきり決めていませんが、しばらくは日本で、マーケティング関係の会社などで働くことが希望です。そのためにも、気を抜かず勉強を続けます。

【立命館アジア太平洋大学日本語教育プログラムの特徴】

◆日本語入門レベルから学術日本語レベルまで大学の正課で一貫教育			◆コミュニケーション能力重視	
◆「読む」「聞く」「話す」「書く」4技能を総合的に養成			◆学術日本語能力の養成	
＜正課＞ ＊言語科目1単位＝95分×15週 ＊専門科目2単位＝95分×15週				
日本語科目	単位数(時間/週)	対象者	到達目標(日本語能力試験)	特記事項
「日本語入門」 「日本語Ⅰ」	8(95分×8/週)	日本語初心者	3級240以上	・日本語学習に専念できる体制 ・他科目の履修制限
「日本語Ⅰ」	4(95分×4/週)	初級		
「日本語Ⅱ」	4(95分×4/週)	初中級	3級320以上 2級240以上	・社会科学系一般教養のテーマ ・専門語彙・表現の導入
「日本語Ⅲ」	4(95分×4/週)	中級～中上級	2級280以上 1級240以上	「付録モデル」 ・専門講義理解のための方略を修得
「日本語Ⅳ」	4(95分×4/週)	上級～超上級	1級320以上	・大学生に必要な日本語能力を修得 (専門講義2単位につき日本語4単位)
「通訳Ⅰ」 「通訳Ⅱ」 「ビジネス」 「メディア」 「日本語教育技術」	各2単位(選択)	超上級	1級360以上	
<日本語環境サポート> オフィス・アワー、日本語情報システム、ピアシステム、日本語ラウンジ				

徹底した「キャリア教育」を1回生時から展開

APUでは、全学生に対して、1回生時から一人ひとりの進路希望やその過程を「キャリア・チャート」に整理し、目標を実現するための適切なアドバイスを行っています。その中で、将来のための目標づくりから、その実現のためのメニューづくり、実際のプログラムの提供まで、きめ細やかなサポートを行っています。

その最も大きな柱ともいえるべきものが『キャリア開発プログラム (Career Development Program)』です。

トップ講演会

APUでは、国際的な規模で発展する企業や国際機関・団体など、各界のトップの方々をお招きしてグローバルな視野でのキャリア形成を目指す『APUトップ講演会』を開催しています。世界の政治・経済におけるトピックを知るとともに、学生が常に取り組みべき課題を明確に意識し、将来への大きな夢と進むべき道を見つけ出してくれることを願っています。

2000年度開催分

■ 第1回トップ講演会

「アジアとの共生

～ローカル外交と一村一品運動～」

大分県知事 平松守彦氏

■ 第2回トップ講演会

「Global Market Trend and Toshiba's Challenges」

株式会社東芝 代表取締役会長 西室泰三氏

■ 第3回トップ講演会

「国際社会における日本の役割～国際貢献とは～」

日本予防外交センター 会長 明石康氏 (元国連事務次長)

■ 第4回トップ講演会

「異文化との共生～日本アイ・ビー・エムの歴史から～」

日本アイ・ビー・エム株式会社

最高顧問 椎名武雄氏

■ 特別講演会

「アジア市場における21世紀のビジネス」

前駐日フィリピン共和国特命全權大使

ユーチェンコ企業グループ (フィリピン) 会長

アルフォンソ・T・ユーチェンコ氏

連続講演会

各界の第一線で活躍中の方々を招いての『業界別連続講演会 (キャリアセミナー)』や立命館大学の卒業生との懇談会も開催しています。これらの講演は、APUで学んでいることと社会との関わり、社会が求めている人材像を入学時点から常に意識させ、「大学でやるべきこと、学ぶべきこと」を各人が明確にすることを目的としています。

2000年度開催分

● マスコミⅠ出版

テーマ：「出版業界ではたらくということ

～日本と米国の出版業界の現状と今後の展望～」

講師：株式会社講談社 取締役 松岡直昭氏

(日本雑誌広告協会理事、立命館大学法学部1966年卒)

● マスコミⅡ放送

テーマ：「ジャーナリストという仕事

～泣き笑い・テレビ特派員の生活～」

講師：株式会社東京放送 (TBS)

メディア国際室 国際部長 岡本英信氏

● 国連・国際機関

テーマ：「国連・国際機関を目指すあなたへ」

講演Ⅰ「国連ではたらくということ」

APU アジア太平洋学部長

鈴木絢子教授 (元国連本部経済社会局長)

講演Ⅱ「国際公務員就職ガイダンス」

外務省国際機関人事センター 所長

伊藤光子氏

● 観光産業

テーマ：「ツーリズム・ビジネスという仕事」

講師：APUアジア太平洋学部

小方昌勝教授

(前国際観光振興会理事)

● 金融業界

テーマ：「これからの金融業界～金融の新たな潮流～」

講師：APUアジア太平洋マネジメント学部

荒川宣三教授 (大和総合研究所顧問)

● NGO・NPO

テーマ：「仕事としてのNGO・NPO」

講師：熱帯農林技術開発協会

理事長 田鎖浩氏

1～3回生

「将来像のモデル提示」

— 国際企業・団体トップの講演会/業界別連続講演会 —

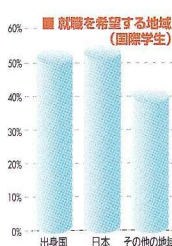
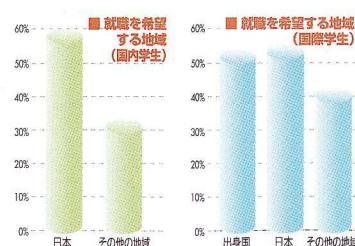
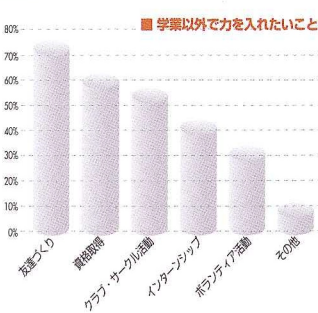
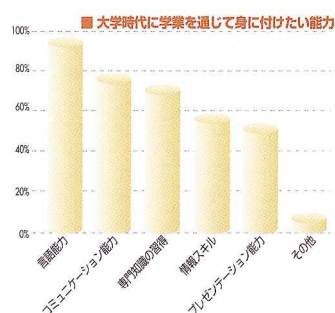
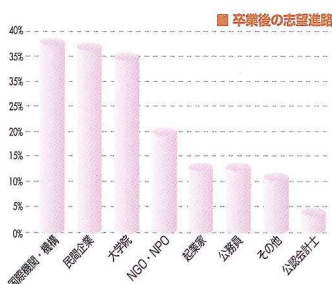
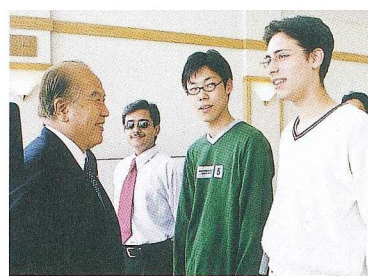
国際企業・団体のトップ、および各界の第一線で活躍中の方々を招いての講演会、立命館大学の卒業生との懇談会などを一回生時から多数開催。学生たちに大学で学んでいることと社会との関わり、社会から求められている人材像、自分の将来像を常に意識させ、「大学時代にやるべきこと」を明確にします。

1回生

「4年間でどう過ごすのか?」

— 進路意識調査アンケートの実施 —

入学当初に希望する進路や学びたい領域についての「進路意識調査アンケート」を実施。さらに、これに基づき、随時進路や履修に関する指導・相談を行っています。すべての学生が入学段階から自分が取り組むべき課題を理解し、常に緊張感と問題意識をもって学生生活を送るよう指導していきます。



APUでは、4年間の学生生活を「キャリア形成」という大きな枠組みでとらえ、正課教育と能力開発、進路指導を一体化したものとして位置づけています。これは、学生の卒業後の進路を「就職」という言葉で表現してきた時代から、雇用環境や個人の就業意識も大きく変化し、個々の自己責任で「キャリア開発」を考える時代に明確に移行してきていると考えるからです。

●●● キャリアプログラム

Development Program



2～3回生

「インターンシップへの参加」

—学んだことの社会での実践—

2回生からインターンシップへの参加を支援します。インターンシップを通じて、自身の「強み」「弱み」を知ることによって新たな学生生活における目標設定をおこないます。また、仕事の厳しさ・難しさを実感させ、確かな職業観を育みます。卒業までに全員のインターンシップ参加を目指します。

ABE Hiroki

安部 博樹 APM 2回生/大分県立大分鶴崎高校出身

「生きる力」をつけるのが学生生活の目標。将来はベンチャー精神旺盛な企業で働きたい。

中国の大学で3年間学んでから、APUに入学しました。ここは、自分のこれまでの経験が一番活かせて、もう一段自分自身が飛躍するためにふさわしいところだと感じました。

大学生活をいかに有意義に過ごすかを考える中で行きついた一つの結論が、サークル「アントレプレナーズ」の設立でした。実社会に触れることができる場、人間形成できる場が欲しかったからです。

キャリア・オフィス主催のトップ講演会や業界別連続講演会では、実体験を通してしか話せない重みのある言葉に大いに感銘を受けました。それに触発されて、アントレプレナーズでも昨年は「サクセス講演会」を計4回実施しました。

自分の未来のために今をどう過ごすかを入学当初から考えさせるAPUのプログラムを大いに活用しながら、学生生活を通じ「生きる力」をつけていきたいと思っています。

3～4回生

「キャリア・カウンセリング」

—個々の学生の進路志望と社会のニーズをつなぐ—

学生一人ひとりの希望や培ってきた専門性、スキルを把握したうえで、社会のニーズと照らしあわせ、適切なアドバイスをおこないます。さらに「プレイズメント・リーダー」（進路に関する学生リーダー）を選出し、学生たちの自主的な活動の活性化をはかります。

HE Jia

へ・ジャ APM 1回生/中国出身

多くの優秀な学生と出会えたAPUは、私にとって最高のフィールド。中国の発展に貢献できる力をつけたい。

中学1年からはじめた日本語学習の中で日本への興味が増し、特に戦後目ざましく発展した経済を学びたいと思い、留学を決意しました。私は2000年秋の入学でまだ基礎的な授業が多いのですが、アジア地域の経済等について学ぶなかで、中国には多くのビジネスチャンスがあることを再認識しました。将来はAPUで学んだことを活かして、中国の経済発展に貢献できればと思っています。

APUは、「学びたい人はいくらでも学べる」大学です。だから、目標を明確にもっていないと何も学べません。ここに来てそれがすぐに分かりました。また、私は中国ではトップクラスの成績だったのですが、APUでは自分より優秀な多くの学生に出会うことができました。これも私にとって大きな収穫でした。

私は、奨学金をもらっているのですが、勉強に専念できるのが何より嬉しいです。このチャンスを活かし、国に帰った時には、「日本で何を勉強したのか」、胸を張っていえるように学生生活を送りたいと思います。



WESTIN, David

ウェスティン デビッド APM 2回生/カナダ出身

アジア太平洋地域のバイタリティは、APUの学生に脈々と流れています。

人材マネジメントや投資についての専門知識を修得し、将来は国際ビジネスの現場で活躍したいと考えています。今後はインターンシップにも積極的に参加して、実際のビジネスの現場を体感し、実践力も身につけていきたいです。今後の世界経済の成長の拠点として注目を集めるアジア太平洋地域のなかでも、日本に格別の興味を感じています。就職の第一志望は、日本の企業です。

APUに集う学生たちにはバイタリティを感じます。クラスで「韓国の経済と企業」をテーマにディスカッションしたときには、大いに盛り上がりました。興味深い意見やアイデアが次々と示され、APUの学生の「知識の引き出し」の多さを実感したものです。そうした仲間のパワーは自分を奮い立たせるいい刺激となっています。

APUのキャンパスライフ

APU Campus Life ●●● 2000

APUのキャンパスライフを1年を通してご紹介します。

国際色豊かなキャンパスでは、毎日が異文化の発見と体験の連続です。

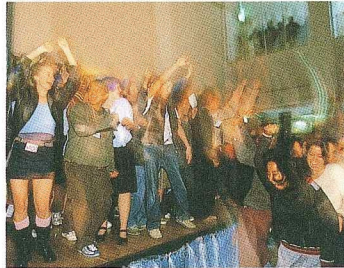
また企業や地域との交流も盛んに行われ、各学生が積極的に学び、成長できる環境です。

4/2 春期入学式



入学式には各国・地域の民俗衣装をまとった学生が参加。キャンパスでは記念撮影が行われ、国際学生と国内学生が仲良く交流する風景が見られました。

4/2 新入生 ウェルカムパーティー



新入生を歓迎する「ウェルカムパーティー」が開かれ、歓迎アトラクションやダンスパーティなどで盛り上がりました。

10/13 経済産業省講座



秋セメスターにおいて経済産業省から講師を派遣していただきMITI 大学講座「アジア太平洋時代における通商産業政策」と題する連続講座を開催しました。



August

8月

July

7月

June

6月

May

5月

April

4月

March

3月

5/8 言語ウィーク



アジア太平洋言語履修の開始に先立ち、文化的行事を通じて各言語に触れられるように企画される「言語ウィーク」。民族舞踊や映画など、工夫を凝らした企画が披露されるほか、生協カフェテリアでは各国の料理がメニューに並びました。



5/10 トップ講演会



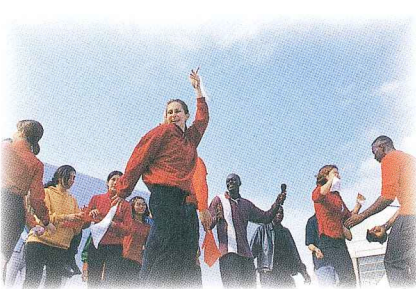
2000年度は大分県知事 平松守彦氏、株式会社東芝 代表取締役会長 西室泰三氏、日本予防外交センター会長 明石 康氏、日本IBM株式会社 最高顧問 椎名武雄氏の講演をいただきました。写真は、講演する東芝会長 西室泰三氏。

10/16 成績優秀者表彰式



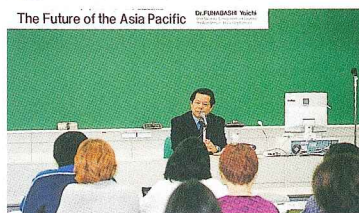
APUでは学業、自主活動、進路・就職に関わる試験、国際交流などの分野で、より高い目標に挑戦する学生を励まし、その成果を表彰する制度を設けています。

11/4 APU FESTIVAL



メインステージでのオープニングセレモニーに続き、各サークルがパフォーマンスを披露し、コンテストやクイズ大会なども行われました。また、模擬店、茶会やバスケットボール対抗戦、ジャズライブなどさまざまな企画が披露されました。フィナーレは打ち上げ花火が夜空を染め、歓声が沸き起こりました。

11/10 APU国際学生シンポジウム



朝日新聞社コラムニスト 船橋洋一氏を招いて、100名を超える学生とのシンポジウムが開催されました。



February

2月

January

1月

December

12月

November

11月

October

10月

September

9月

1/1 APU的新年の迎え方



APUハウスで年越しする学生たちによる「世界紅白歌合戦」が開催されました。終了後カウントダウンが行われ一斉にクラッカーを鳴らして新年を祝いました。元旦は、キャンパスを一般に開放し、約300人の市民が初日の出を鑑賞しました。また早朝から、カフェテリアのキッチンで国際学生が自国の新年の料理を作り、テレビ局の取材も受けました。

12/20 スピーチコンテスト



日英2言語を使用したデュアル・スピーチ・コンテストが学生団体SIAAPSと言語教育センターにより共催されました。

12/23 クリスマス HANABIファンタジア



毎年クリスマスに実施される冬の花火のイベントに、APUの国際学生が参加してパフォーマンスを繰り広げてくれました。

10/2 秋期入学式



おもに国外の学生に対応するため、APUでは秋期入学式が行われました。

10/8 BEPPU ドリームバル



学生のチームを組んで参加。国際学生のパフォーマンスに、会場はおおいに盛り上がりました。

10/13 新歓パーティー



新入生を歓迎するアトラクションやダンスパーティなどで盛り上がりました。

10/18 世界報道写真展



APU開学を記念し「第43回世界報道写真展2000」が学生チューデント・ホールで開催されました。地域紛争、スポーツ、科学、自然などをテーマとする迫力ある世界レベルの写真が展示され、一般にも公開されました。

学生の自主活動

Student Activities ●●● at APU

開学2年目のAPUは、どんな活動も学生の意欲と工夫に支えられています。

学術・文化サークルから学生のサポートまで、キャンパスの内外を問わない多彩な活動を通じて、彼らは他大学では味わえない貴重な体験を積み重ねています。

SIAAPS (シーアップス)

深津 陽子 / APM 2回生 (奈良県・奈良市立一条高校出身)

発想はいつも世界規模
アジアと大分の
架け橋になることも夢じゃない

正式名称はStudent Information Association of Asian Pacific Studies、会員は現在約20名、他のサークルに比べて国際学生が多いことが特徴の一つです。

アジア太平洋地域にあるさまざまな課題について考えるとともに、具体的にアクションをおこし、それをAPUから世界に発信していくことを目的に創設しました。

昨年の主な活動は、①11月に学内で行ったスピーチコンテスト、②ミャンマーに古着を送ろうプロジェクト、そして③一村一品運動を研究し、それをアジアそして世界に一層広めていこうというプロジェクトです。

スピーチコンテストでは、「私の将来とアジア太平洋」というテーマを設定し、参加者に英語と日本語両方でスピーチしてもらうデュアルスピーチコンテストという形式をとりました。共同通信社と大分合同新聞社にはスポンサーになっていただくとともに、新聞にも取り上げていただくことができました。APU開学の年に初回コンテストを開催できたので、APUの恒例企画として継続開催していきたいと考えています。2001年夏にはシンガポールで、「アジア太平洋」をテーマとしたプレゼンテーションのコンテストがあります。それに是非SIAAPSからも代表を送ろうと考えています。世界のレベルを知り、自分達がどの位置にいるかを知るいい機会であると思いますし、世界の大学生や高校生にAPUという名前を知ってもらえるというのも大きな魅力です。

一村一品運動のプロジェクトは、2000年5月にAPUで開かれた平松守彦大分県知事のご講演がきっかけです。お話を聴いて、東南アジアか

らの学生達が非常に興味を持ったのです。日本もODAなどで国際貢献を行ってはいますが、それが本当にローカルレベルに行き渡っているのかという疑問も多いようです。ですから、ローカルなレベルから少しでも貢献できることを実践したいと思っています。大分県の協力も得て、APUで学んでいる国際学生の出身地の特産物などを大分のどこの町に紹介したり、またその逆もあるかと思えます。私たちの活動を通じて、大分県の市町村と、アジアのとある町との間に新たな架け橋ができる、そんな大きなことも夢ではありません。

SIAAPSに入って1年が経ちました。やはり、やる気のある人と一緒に活動をするということは、やりがいもありますし何より楽しいです。また、新しいことを始めるということに対する抵抗は全くなりませんでした。それに、SIAAPSで討論していると、出てくる話がすごくビッグ、世界規模なんです。そんなところに大いに刺激を受けた私は、「もっと勉強したいとか何か行動を起こしたいなら、まずSIAAPSに入って、そこからみんなに声をかけてやっていこう。SIAAPSだったら本当にそれが出来ます」と新入生に話かけ、一緒にやっていく新しい仲間を募集中です。



Dikir Barat (ディキルバラ)

Farah Nurikram Ramleh / APM 2回生 (マレーシア出身)

ダンスも世界共通語 (ダンスに国境はない)
観客との一体感は最高

Dikir Baratというのは、マレーシア、シンガポール、インドネシアでは有名なダンスで、結婚式やお祭りなどおめでたい時によく踊られます。マレーシアの私の住んでいる町では、学校にクラブやサークルがあるくらいです。

APUで最初に踊ったのは、昨年5月のAPU開学祭です。シンガポールの学生が呼びかけにはじまり、Dikir Baratを知っている国の学生達を中心に10数名で行いました。舞台と観客のあいだで一体感を感じることができるDikir Baratは予想以上に好評を博し、それからは県内各地からは是非来て欲しいと声がかかるようになり、この1年間のうちに約30カ所で行ったDikir Baratを披露しました。お祭りなどに参加する機会は、神楽など日本の伝統的文化にも触れることができる貴重な経験にもなりました。



一番印象に残っている舞台は、約90名で踊った2000年12月の別府クリスマスファンタジアの舞台です。半数以上が日本人学生。あれだけ大勢で踊ったのも初めてでしたし、

1カ月足らずの限られた時間の中で随分練習しました。

実は、最初私はDikir Baratは、他の国の学生にはできないと思っていたのです。音楽もリズム感も独特で、他の国々・地域のものとは全く違うものなので、一緒に踊ることは難しいと思ってしまっていました。しかし、やってみようという学生達の希望に応える形で、半信半疑ながらも教えてみたら、確かに彼らにとっては難しいけれども、不可能なことではなかったのです。一生懸命取り組んでくれる姿に触れ、やりがいさえ感じました。そして、クリスマスファンタジアでは、最高のパフォーマンスを披露することができたのです。音楽とかスポーツには国境がないといいますが、それはダンスにもいえることなのです。

今年度は、「APU Dikir Barat」という名称でサークル登録しました。サークル活動では、Dikir Baratだけではなくアジアの他のダンスも勉強したいですし、加えて東南アジアの文化や言語を学ぶことも重視したいと思っています。まずは、スプリングフェスティバルで新たなパフォーマンスを行い、新入部員を獲得したいと思っています。昨年度1年間の活動を評価していただいた自主活動奨励賞の賞金は、衣装代や楽器代の一部として有効に活用します。今年は、ダンスを披露するだけでなく、ダンスを教える活動、そしてアジア各国・地域の文化をAPUの学生や広く県民・市民の方々にも知っていただくことができるような活動を展開したいと思っています。



Entrepreneurs (アントレプレナース)

小倉 謙 / APM 2回生 (岡山県・岡山理科大学附属高校出身)

社会を知り、自分を知る
十年先のプランを持っている
人間にとっては魅力的な場所です

「APUで学んだ知識をベースとしながら、社会に触れることによって、人間的な応用力を養っていく場がほしい」と考えこのサークルを企画し、昨年5月に立ち上げました。

「アントレプレナース」の名の通り、起業を念頭において活動を始めたのですが、具体的に何をやるかということを決めるまでがまず大変でした。議論を重ねる中で、①APUの国際色豊かな環境を活かしたい、②サークルメンバーの多くが留学経験等を持ち、その国々でそれぞれ忘れられない支援をいただいた。APUの国際学生とともに何かできないか、③市民・県民に対して貢献したい、という基本的方向性が整理でき「語学教室」を始めようということになりました。秋から本格的準備に入り、マーケティングリサーチ、学園祭や市内での体験入学会の開催、授業システムの策定、パンフレットやテキストの作成などを行い、この4月、小学3～6年生を対象とした語学教室「たんぼぼ」を開講することができました。私たちが種をまく、花が咲きワタゲのようにここから世界に羽ばたいて欲しいという願いを込めて命名しました。

「たんぼぼ」では、楽しんで学ぶことで英語を好きになってもらうことを重視しているため、最初はゲームも多く取り入れ、五感で体験しながら学ぶ形式をとっています。講師は、インドからの学生が2名とフィリピンからの学生が1名で、それぞれがクラスを持っています。4か月1セットで、9月にはワンステップレベルアップしたコースを新たにはじめます。毎回の授業の様子を保護者の方にご報告する連絡帳制度を導入、また「BRIDGE」という異文化理解を深める月刊冊子の発行により、家庭でも英語に親しむことのできる環境づくりができるよう心がけています。初回の授業を終え、子供達が「楽しかった」と笑顔で帰ってくれた

のが何より嬉しく、確かな手ごたえを感じました。この語学教室の経費を除いた利益に関しては、国際学生のために使える使途を検討中です。

今はこの教室を継続・発展させていくことが、これを生み出した僕達の最大の責任であると思っています。APUが誕生したことにより、4年後には別府は日本でも有数の外国人比率の高い町になるでしょう。それ



は、真の国際都市になりうる可能性を持ち得たともいえます。「たんぼぼ語学教室」が、その可能性を現実のものにするためのきっかけの一つになればと願っています。

今のサークルの状況を一言でいうと、「とにかく忙しい」ということに尽きます。でも、その分得るものが大きいからやっています。厳しい活動の中で残ってきたメンバーですから、結束力も抜群です。10年後、このアントレプレナースが、ここからそれぞれの世界に羽ばたいたメンバーによる強力なネットワークを有し、ビジネスに活かせる有効な情報交換ができる「知的な場所」となっていることを僕はイメージしています。

RA (レジデント・アシスタント)

田澤 直也 / APS 2回生 (北海道・立命館慶祥高校出身)

二十四時間年中無休
思いっきり鍛えられます

Resident Assistant (RA) の任務は、APハウスにおいて寮生の日常生活を様々な面でサポートすることです。RAになろうと思ったのは、APハウスに住んで国際学生達と一緒に生活したら、英語も上手くなるだろうし、いろんな言語も文化も勉強できるかもしれないという、気軽な思いからでした。しかし、昨春の入学とともに始まったRAとしての生活は想像を絶するものでした。RAとしての1年間をひとことであらわすとしたら、「とにかく大変。でも楽しかったし、鍛えられました。」ということでした。

学生達は、1年後にはAPハウスを出て別府市内で生活することになります。世界中からAPUで学ぶことを熱望し集まってくる学生達が、「日本で生きていくための基礎的な力を養う」のがAPハウスです。APハウスや日本で生活を送るにあたってのルールを教えること、APハウス内行事の企画・実施、日本語の学習サポート、そして緊急対応などがRAの仕事になります。ほとんどの学生は入学時点では日本語が話せませんので、言語の違いからくるコミュニケーション不足もありますし、文化や宗教の違いからくるトラブルも頻発します。特に、生活習慣の違いからくるトラブルは、時には喧嘩に発展することもあります。それぞれの国で生まれ、以来続けてきた各人の「常識」を変えることは本当に難しいことです。そんなときは、ヒアリングを丁寧にし、根気強く指導していきます。全体に教訓化したほうがいいことはRAミーティングで報告し、徹底して議論してきました。

そして今年RA2年目を迎えています。やり残したことがまだまだあると思い志願しました。1年目は日本人学生ばかりであったRAも、2年目は日本人と国際学生半数ずつになりました。迎える側に各国からの国際学生がいるというのは、それだけで新入生にとっては大きな安心であ

り、コミュニケーションも円滑となり、ルールの理解度も断然違います。また、国際学生RAの場合は、前年度APハウスで生活していた視点から見ることができることも大きいです。今年は、昨年の反省から必要と思われる課題(ゴミ問題・イベント・広報・風紀・会計)に即し、グループを編成をしました。昨年とは比較にならないほど、APハウスは穏やかです。

RAは、APハウスに住む学生達にとって、時には母や父であり、教師であり、オフィサーであり、管理人であり、そして同じ学生同士である、というようにいくつもの顔を持つことになります。時には激しく言い合うこともあります。寮生のなかから協力者ができたり、自室の前の伝言板に「ありがとうございました」なんてメッセージが書かれていたりすると感激でした。APハウスでは、互いの違いを理解しなくては共に生活していくことは困難なことであり、人間が変わっていく姿を目の当たりにしてきましたし、その中でも自分も変わらざるを得ませんでした。

24時間年中無休、逃げられない立場に置かれるRAは、自分を鍛えるのには最適です。

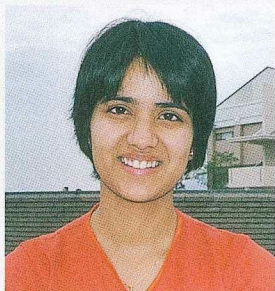


学生の声

Messages from ●●● Students

世界の各国・地域から集まっているAPU学生の個性や考え方は実に多彩なものがあります。
APUで学ぶことや、多文化環境の中で自らがいかに鍛えられているかを語ってもらいました。

私の夢はアジア太平洋地域の繁栄をみること



チョドリ シュラダ
CHOWDHURY, Shradha

APS 2回生
インド出身

世界という舞台の上で、私たちには各々役割があります。この新世紀において、世界にもっとも貢献できるのはアジア太平洋地域においてほかにありません。ここには、まだ発掘されていない大きな可能性が秘められています。いまアジア太平洋では、教育を受け、世界的視野を持ち、国家間の境界を取り除くことができる人材が必要とされています。この多様な地域についての知識を深め、自分とは異なる背景や文化を持つ人々への理解を研ぎ澄ましながら、私はグローバルな人間になりたいと思っています。

異なる文化や価値観を理解する能力なくしては、競争の激しい国際的なフィールドで成功することが不可能だということは、周知の通りです。この国際大学では、多数の国・地域から来た学生たちと共に勉強し、交流できます。これは価値のつけられない経験です。

私はこれまで、アジア太平洋の若者の代表として、国連に招待されてバンコクや中国で開催されたさまざまな会議でスピーチを行ってきました。この経験を通じて、私は若者たちの持つ可能性の大きさに気付くようになりました。この地域が発展していくためには、個々の役割がどんなに大切かということもわかってきました。アジア太平洋地域の政治や経済、国際関係、文化などについてさらに勉強を重ねることで、この地域の専門家として国連に入るための知識が身に付くと考えています。APUを卒業したら、アジア太平洋のために私のエネルギーを注ぎたいと思っています。

ます。しかし、日本独自のワークシステムを経験するためにも、日本語のコミュニケーション能力を高めるためにも、数年は日本の企業で働くことを考えています。

出身地のインドで、私は人々が飢えと渴きで亡くなるのを見てきました。少数の欲深い人々のせいで、国全体が苦しんでいるのです。外国で働き、できるだけ多くのケーススタディを行うことで、政治や行政のシステムに透明性を持たせることができればと思っています。インドは問題が山積しているにも関わらず、今日の世界において経済的にも政治的にも急進しつつある国の一つです。そのインドに特に焦点を当てながら、国家間の協力体制を促進するための研究を行いたいと思います。

アジア太平洋の未来は明るいと確信しています。しかし、若者のほとんどが自分の義務や責任に気付いていないことを私は心配しています。この地域の発展を当然のことと考えず、一生懸命に取り組んでいくべきだということに、もっと多くの人が気付いてくれることを願うばかりです。アジア太平洋の多くの国が過去に抑圧を受けてきましたが、その時代を埋め合わせるために、私は自分にできる最善を尽くしたいと思っています。アジア太平洋の繁栄を見ることが、私の夢なのです。

APUでのアジア太平洋の研究が、私に数多くの進路を開いてくれるだけでなく、私を一人の人間として完成させてくれると信じています。

21世紀に生きる方法をAPUで学ぶ



トイヴォネン トウッカ
TOIVONEN, Tuukka

APS 1回生
フィンランド出身

1) 21世紀は、人類史においてたいへん興味深い時代です。グローバル化しつつあるこの世界の未来が成功するか失敗するかが懸る避けられない転機だといえるのです。私たちは、環境問題、人口過多、利益と開発の不公平分配といった解決されなければならない大きな問題に直面しています。これらの難しい問題をいかに解決していくかが、私たちが未来社会を成功させるための鍵なのです。

2) 現代に生きるどの分野の専門家であれ、技術の発展や、世界的な競争と協力への移行に追いついていくのは極めて難しい仕事となってきています。このような状況に対処していく力をつけるために、そして将来生き残っていく唯一の方法である「生涯学習者」となるように、私たちを指導してくださるAPUの先生方に感謝しています。

APUでのさまざまな課外活動は、私に異文化間コミュニケーションや人間関係、リーダーシップなどについて多くのことを教えてくれます。なかでも特に音楽

は、勉強とのバランスを与え、文化間の境界を真的意味で取り除くという、大きな力を持つものだと思っています。現在私は、11人の国内・国際学生と共に、活発な「多国籍音楽グループ」を設立しようと取り組んでいるところです。

3) 最後に、私はアジアとヨーロッパの両方の著しい発展をよく知るEU加盟国の一国民であることを誇りに思っています。アジア太平洋が一つの地域として目覚ましい発展を続けるにつれ、この地域とヨーロッパとの協力関係はますます強くなり、私の知識が役に立つ機会がさらに増えると考えています。

私はAPUでアジア太平洋地域出身の多くの友人をつくり、アジア太平洋地域についての理解を深めて、この地域がヨーロッパ地域との協力を強めるための架け橋として役立ちたいと思います。

日常生活で体験し学ぶ、異文化間コミュニケーション



辻本 文香

TSUJIMOTO Ayaka

APS 2回生
兵庫県立芦屋南高校出身

私が、APUの事を知り、「この大学こそが、自分の将来につながる大学だ。」と思い、入学して1年と少し経ちました。中学の頃、2年間スイスのインターナショナルスクールに通い、様々な国の人と出会う中で、異文化や国際関係に興味を持ち始めました。高校は国際文化科という専門学科を選び、異文化交流によりいっそう興味を持ち、もっと継続し深めていきたいという思いがつのりました。この希望をかなえるために、APUは最高の場所だと思いました。

APUでは、授業はもちろんのこと、課外活動から多くのことを学ぶことができます。例えば、私はジャズサークルの副部長を務めているほか、スプリングフェスティバルのスタッフも経験しました。一期生ということで、全てが何もないところからのスタートです。基盤もないところから、立ち上げていかなくてはならず、問題、苦労や失敗はたくさんあります。その上、様々な国の仲間が集まっているAPU。価値観や考え方の違いにより起こる問題もあります。ミーティング一つをとっても、言語問題、意見やミーティング自体の進め方の違いなどで悩んだこともあります。しかし、そこから学ぶことは、数えきれないほどあり、仲間ともめ、自分と葛藤しながらも、一緒にある目標に向かって築き上げていくことが出来るという喜びは、ここAPUでしか味わえないことです。

そして何より、レジデント・アシスタント (RA) になったことは、私の中でとても大きなことです。RAは、APUハウスで国際学生と共に生活し、APハウスの運営や

寮生の生活上のサポートを行います。とても国際的なAPUの中で、一番国際学生と近い場所で共に協力し合える生活できるAPハウスでの生活から学ぶことは、数えきれないほどあります。特に、APハウスでの生活を通してコミュニケーションの大切さを学びました。文化や習慣がそれぞれ違うということで、自分が今まで当たり前だと思っていることも、ここAPハウスでは通じません。説明や注意をする時も、できるだけ詳しく説明するように心掛けています。また、異なった習慣や文化に触れることが出来ると同時に、自国である日本についても深く考えさせられます。私たちは分かっているようでありながら、自分の文化ほど見えないものはないでしょう。それは、私たちの生活にとっても密着しているものだからです。しかし、この環境では、国際学生のちょっとした一言や動作で気づくことがよくあります。自国の文化、そして自分を見つめなおす機会を与えてくれるのです。目標や意志を共有している他のRAと問題について話合ったり、よりよいAPハウスを作るために、意見を交換したりすることで、一步一步改善していこうと努力しています。お互いに刺激し合えるAPUならではのこの環境は、毎日が新しい発見の連続です。科学技術の発展や国際化に伴い、国を超えたコミュニケーションがますます増えていくことは間違いのないでしょう。その中で、日常生活で毎日知らず知らず行われている異文化間コミュニケーションは、私の将来を切り拓くとても大きな糧になると信じています。

知の再編と21世紀



加藤 徹生

KATO Tetsuo

APS 2回生
大阪府立阪南高校出身

アメリカの文化人類学者Margaret Meadはかつてこう述べています。

"Never doubt that a small group of thoughtful, committed citizens can change the world. Indeed, it's the only things that ever has."

私はこの21世紀において、Mead が述べたような創造的な人間でありたいと思います。

現代は、科学にとっても社会にとっても、現実を全体として把握することが困難になりつつある時代です。みせかけの物質的繁栄の陰で、自然環境の破壊や社会的対立、生命観・価値観の混乱が深刻さを増しているのもそのためでしょう。自然と人間との新たな調和を可能にするような思想こそが求められています。既存の枠組みに固執する個別科学の知の加算的総合では、積極的な問題解決を望むことは不可能になっています。旧来の偏狭なアカデミズムに陥るのではなく、それにマネジメントの要素、社会的要素とをバランスよく織り交ぜることにより、新たな問題解決のためのパラダイムを創出することこそが、人類にとって求められています。

私は、このAPUで、情報、環境、観光、社会学といったアジア太平洋学が捉える学際的な知識だけではなく、様々な視点から総合的にものごとを追求していくよう努力しています。正課の授業はいうまでもなく、大学に入学し間もない一回生のころから、長期滞在型

観光研究会、社会理論ゼミ、都市ゼミとそれぞれ異なる教授が主催される研究会で、大学という「場」で得るべきものを貪欲に吸収し、自分自身が新たに創り出すべき学際的かつ総合的な知識と経験を培っています。

同時に、新設大学という、すべてを自分たちで創り上げなければならない環境のもとで、伝統を自分自身が創り上げるという大きな経験を得ています。それは、出来上がってまもない学生団体の間の連携を創り上げた「サークル・ユニオン」の代表としての経験であり、学生の主導によって、APU独自のアカデミズムを創造することを目指した「アカデミック・キャンプ」という活動を主導した経験です。その二つの団体で、自分が中心的な存在となり、リーダーシップを取ったことによって、学問的な知識だけでは得ることのできない経験を自分自身が身に付けることができました。

現在、私が掲げる進路は大学院進学ですが、大学での「学び」と経験をさらに昇華させ、地球規模の問題解決に不可能な、深い専門知識と学際的な研究を成り立たせうる幅広い教養、さらに、問題解決に不可欠なマネジメント的知識、経験を、自分のものとして確立したいと考えています。そして、この21世紀においてMeadが述べたような“a small group of thoughtful, committed citizens can change the world”の一人であり続けようと思っています。

学園イベントを通じて得られる、パイオニア精神とスキル



笠松 裕史

KASAMATSU Hirofumi

APS 2回生
大阪府立岸和田高校出身

第一回のスタッフミーティングで「Spring Festival 2001」の実行委員長の推薦を受けたとき、はっきり言って「まいったなあ」というのが私の正直な感想でした。昨年に行われた第一回学園祭で様々な問題が発生し、苦労しているスタッフを知っていたからです。私もその一員として問題を一つ一つ解決しましたが、今回はそのまとめ役ということで大変な苦勞を覚悟しました。

APUではアジア太平洋地域をはじめ世界各国からの様々なバックグラウンドを持った学生が集まっています。その中で一つのイベントを作り上げるというのは大変な苦勞がありました。様々な価値観をもつ学生と連携し、どういう形でよりよいもの創り上げていくか。どうすればAPUにおける学生活動の発展のために役に立てるのか。そのことを第一のテーマとして運営に着手しました。

APUは開学して間もない大学です。何か企画を立てようとしたときに、参考となる前例や経験もほとんどありません。何をするにつけすべてが手探りの冒険です。そのなかで一つのものを作り上げていくということは、非常に刺激的で、楽しい経験です。

毎日仲間とあらゆる企画を検討し、考えられるすべてのケースについて議論をしました。時には宗教的なことなど、デリケートな問題に議論が及ぶこともありましたが、取り扱う問題が複雑になればなるほど解決に要する時間も長くなり、一時はどうなることかとさえ

思うほどでした。そうした問題の解決には従来の思考にとらわれない柔軟な発想で切り抜けることができました。明確な基準がないのならつくればいい。それがだめならまた新たなものを。そういう発想で問題の処理にあたりました。

新しいものを作り上げる時には産みの苦しみが常に付きまといまいます。また、それは同時に新たな未来を創造するという喜びでもあります。そんな時、常に私たちはパイオニアであり続けることができる存在なのだという気持ちを持つことができました。

こうした経験は将来、いかなる職業に就くにせよ大きな経験として役に立つと思います。今までの習慣や既存の価値観にとらわれることなく、常に柔軟な発想と変化に対応できる能力を持ちつづけることが重要だと実感しました。

今回のイベントは成功を収めることができました。今回のイベントで得た成果をもとに、学生組織の運営体制や大学との協力関係など、改善の余地がある部分に関してはしっかりと議論していき、APUの一期生としてよき伝統を創ることができるように努力していきたいと思っています。そして、このマルチカルチャルキャンパスを活かして、どんどん新しいことにチャレンジし、「これがAPUで得たスキルだ」と、将来にどのような世界に飛び込んでいっても、誰にも負けることがない、企画運営能力を身に付けたいと思っています。

ベトナムとアジア太平洋地域の発展のために



グエン トリン

NGUYEN, Trinh H.H.

APM 1回生
ベトナム出身

APUで学生生活を送る中で、私は自分の能力を高め、夢に近づく貴重な機会を次々と得ています。以前から国際マネジメントと国際関係を学びたいと強く思っていたものの、そのチャンスはほとんどありませんでした。しかしAPUでは、勉強と課外活動を通して国際ビジネスを学ぶことがわかりました。私がAPUを選んだ理由は、「ハイテク世界市場と多文化環境においてマネジメントに携わる」という自分の将来の目標にもっとも近いことが学べると思ったからです。

世界に国際大学は多数ありますが、APUは私にとって最適な場所です。この環境のもとで、私は他の学生たちと一緒に勉強し、生活し、彼らの文化や生き方について理解を深めることができます。加えて、起業マネジメントのスキルや新しいビジネスチャンスを発見する能力が養われるでしょう。APUの教授たちや起業家精神を持つ学生たちと一緒に、将来の計画について話し合うことが楽しみです。私は、ベトナム・日本・APUが相互に良い関係を築いていけるように、自分の持つスキルと経験を最大限に活かしていくつもりです。APUで4年間勉強した後は、身につけた豊富な知識、マネジメント能力、分析力、コミュニケーション能力を生かしてビジネスの世界で活躍したいと希望しています。APUが有するネットワークや協定校などのパートナーにより将来はビジネスにおいて成功する大きな可能性があると思っています。

私は、ベトナム人であることに誇りを持っています。

近年ベトナムでは、21世紀における安定した持続可能な発展を促進するために、知識ベースの経済を目指して開発戦略をすすめています。この目的を達成するために、ベトナム政府は教育を何よりも重視しています。ベトナムにおける教育は、これまでのよく勉強する伝統の上に、知的水準を引き上げ、知識と教養のある国民を育てることを目標にしています。またベトナム政府は、資格と技術を持つ人材の開発に高い優先順位を置いています。特に、先端技術を扱う分野や、企業経営、リサイクル・トレーニング、経営者教育、科学や教育の分野での経験・知識の交換においてです。戦争から開放され、以前よりずっと自由に夢を追えるようになった現代のベトナムの若者は、世界に追いつくために一生懸命に勉強しています。ベトナム人として、またAPUのエネルギーにあふれる学生の一人として、私はベトナムの明るい未来のために、そしてベトナムとアジア太平洋地域の他の国・地域との良い関係を築くために、最善を尽くして専門知識を吸収していきたいと思っています。

APUの環境だから学べる、グローバル化と個人のアイデンティティの共存方法



ゲルガナ・マリノヴァ
MARINOVA, Gergana

APM 1回生
ブルガリア出身

「万物は変化のなかにある（万物流動説）。」古代ギリシアの哲学者ヘラクレイトスが唱えたこの有名な説は、現代の社会とライフスタイルにぴったりとあてはまります。新世紀が始まり、経済の市場化や情報技術の発達で世界の人々は一つにつながりましたが、それに関わらず、文化が人々を分け隔てていることに変わりはありません。

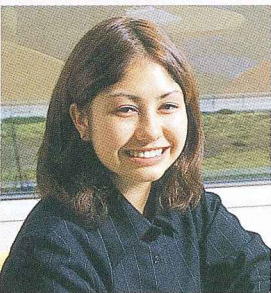
いま現実社会では、人々の均質化と個性の確立が同時に起こっています。一方で、人々はますます多くのものを共有するようになり、ものすごいペースで都市へと移動し、コンピュータを買い換え、職業を変えています。人生は、ダイナミックな競争に巻き込まれ、優秀で生命力のある者のみが生き残るのです。

しかし、それでは現代において、「個人」とは何を意味するのでしょうか。近頃では、個人主義の観念が民族主義の観念の影に隠れてしまっているように思われます。技術や政策、社会基準が刻々と変化する世界において、人々は慣れ親しんだ自分の民族の文化に安心を求める傾向にあります。しかしながら、民族紛争によって世界は常にまとまりを失い、人々は個性の確立という世界的なトレンドに追従するのをためらっているのです。

私は、グローバル化と民族のアイデンティティの保存だけが唯一の思想ではないことを立証するために、APUに来ました。さまざまな文化的背景を持つ学生がいるAPUは、小さな秤に載った世界のようにもあ

す。この世界のミニモデルのなかで、私は、人々がそれぞれ帰属する民族のなかで得た人生観を変えずに、人々を結びつける方法を学びたいと思います。将来は、APUで身に付けることができるはずの自分の寛容性を、マルチナショナルな環境で試してみたいのです。それまでは、可能な限り多くの文化を吸収していきたいと思っています。なぜなら、「人間の能力は、文化によって高められる」（ジョン・アボット）のですから。

スペイン語サークルで培う、異文化理解能力とマネジメント能力



楠元 景子
KUSUMOTO Keiko

APM 2回生
京都府・京都市立日吉ヶ丘高校出身

私は現在日本国籍ですが、自分の中では二つの文化が生きています。日本人の父、メキシコ人の母を持ち、メキシコで生まれ、9歳までメキシコ人として育てられました。そして11年前に来日し、今度は日本人として育てられました。そこで初めて自分は何者であるのかというアイデンティティと、このような境遇に生を授かり、将来自分はどのように生きていくかについて考え始めました。

現在、私はAPUに通い、日々、多くの文化の人々と接しています。彼らとコミュニケーションをとることで私は異文化を受け入れる器が大きくなったように感じています。また、日常生活で接するだけでなく、スペイン語サークル「Chispa Latina」のリーダーを務めていることも異文化を受け入れる私の器が大きくなった要因の一つです。

このスペイン語サークルは、数少ないスペイン語圏の国際学生とスペイン語能力をある程度持つ国内学生、国際学生とそれ以外の国内学生で構成されています。このサークルでは、スペイン語圏のことを調べて発表し、スペイン語で会話をすることが主な活動ですが、私にとってはもうひとつの文化を保てる場所です。なぜなら、私はメキシコを離れてから二回しか帰ってないため習慣や文化、国の事情に疎くなっていますが、Chispa Latinaを通じて、知らなかったことを新たに知る、忘れたことを蘇らせる機会を得ることができます。

一方、Chispa Latinaのリーダーを務めることで団体をまとめることの難しさをも学んでいます。サブリーダーと共に活動を行っていますが、違った文化の人をまとめることは大変難しいことであると実感しています。日本人はきっちり計

画的に物事を行おうとしますが、スペイン語サークルの国際学生は、柔軟にものごとを受け入れようとする姿勢があるからか、ある程度までは計画的ですが細部まで詰めて行おうともしません。そのため、時と場合によってまとまりが無いこともあります。このギャップを埋めることがリーダーである私とサブリーダーの任務です。このことがChispa Latinaのリーダーを務める難しさです。

将来、これらの経験を生かせることはないかと考えている矢先に、国際経営の講義で、「企業内の文化の違い」について学びました。ビジネスがグローバル化していることによって企業内での文化の違いが生じ、そのことが企業内の人間関係を円滑に運ぶ妨げとなっています。この問題を解決するためには、企業で働く各個人が異文化を理解することが重要となってきます。

私は、Chispa Latinaのリーダーとしてサークルを動かすマネジメント能力とさまざまな文化に触れることで培った異文化理解能力を身につけ、グローバル化しているビジネスの舞台で活かしたいと考えています。企業内の文化のコンフリクトがなくなれば、ビジネスはグローバル化しやすくなると思います。

そのためにも私は、今後自分のアイデンティティを保ちつつ大学でさまざまな文化の人々と接し、またChispa Latina内の文化ギャップをどのようにすれば解決できるのかをみいだし、将来ビジネスの世界で活躍するために必要な能力を身につけていくことを目標としています。

サッカーを通じて広がる夢、日韓両国の友好に寄与したい



金 容賛
KIM Yong-Chan

APS 2回生
韓国出身

私は中学生の頃から日本に多大な関心を持っていました。一人で日本語を勉強し、日本の様々なことが分かるようになりました。それにより、ますます興味を持ち、日本へ留学したい気持ちになったのが高校時代でした。

その時の私は日韓関係という、より大きな関心事ができて、両国の友好関係促進に寄与したいという目標、夢を持つようになったのです。

私の高校は運良くAPUと協定を結んでいる学校なので、APUのことについてよく知ることができました。半分が日本人で、半分が外国人という国際的な大学であること、第1期生なので何もない状態から何かを作っていく充実感を得られること、また私の夢に関しても、APUは私に関心を持たせるのに充分でした。

APUに合格してから私にはもう一つの夢ができました。それは私の主な趣味のサッカーについてです。サッカーが大好きな私は、「もしAPUに入学したら国際的なサッカーチームを作ろう!!」と決心したのです。それまで夢って考えたこともない私だったので、その夢を叶え得るAPUという舞台は、極めて魅力的でした。

いよいよ2000年4月、APUに入学し新しい生活が始まりました。日常生活から学んでいる日本の文化と、世界の色々な国・地域からきた国際学生との交流で感じるカルチャーショックは、他の大学では経験できない素晴らしいことです。特に韓国ではあまり知り得なかった在日韓国・朝鮮人との出会いは、研究したい日

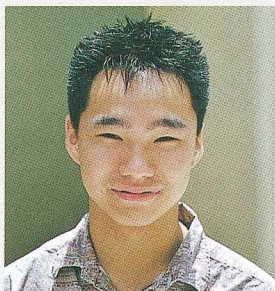
韓関係の新しい局面を認識するきっかけとなりました。彼らに様々な話を聞いたり討論会に参加したりして、彼らの事情がもっとよく分かり、新しい自分の立場を考えはじめています。

一方、サークル活動でも希望どおりにサッカー部をつくりました。やはり何もない状態から始めるというのは、いつも問題ばかりで苦勞の毎日でした。「もう、やめよう」と思った事も多かったのですが、自分が決めた目標なのであきらめずに解決方法を探し、一つひとつ問題も解決していき、サークルも落ち着いてきました。活動をしながら英語圏の学生達と話す機会も多くなって、英語が苦手な自分に役立っています。サッカー部を運営しながら、人との関係など正課では学べないことを学びました。活動が活発になることによって、規模も目標もふくらんで、今年の夏休みは韓国へ遠征に行く予定です。

無論そういう課外活動と共に、授業を受けながら世界の舞台に一步一步近づいていき、世界に対する視野が広がるのを感じています。

これまでの様々な経験と、これからの経験が、私の将来にどのような影響を与えるでしょうか。私は、自分が決めた目標に近づいていけるという可能性を信じ、今日も頑張っています。

多文化調和の将来の世界像を全世界に発信!



深澤 彰
FUKASAWA Akira

APM 1回生
千葉県・千葉市立稲毛高校出身

APUは将来の世界の縮図が見て取れる大学です。全世界の人間が集まり共に暮らしていく世界が、ここAPUでは始まっています。学生の半分を占める留学生は、APUを構成している一員であり、決して特別な存在ではなく、APUの学生共同体の一員であるということが出来ます。

特にこのことを実感するのがAPハウスにおいてRAとして働いている時です。世界各国の文化や人々が交流するこの場所では、世界中の学生がそれぞれの文化を持ち寄り、それらが調和した新しい文化を作り上げています。これは決して日本の文化に合わせたものではありません。日本文化もその中の一つの文化であるに過ぎず、それぞれ学生が持ち寄った文化が混じり合わさった社会ができあがっています。

もちろんこのような過程の中では、自然と異文化による摩擦や行き違いが発生しています。この時に重要なことは決して自分の文化を押し付けるのではなく、お互いの文化を学び合うことです。そのことによって、物事に対する視野の広がりや新しい考え方や取り組みなどが生まれ、自分の生きている世界をさらに大きくすばらしいものにすることができます。そしてこれは世界中の人々の共存を可能にする唯一の方法だと考えています。このような現象は、近い将来、日本全国で、そして世界各地で見ることができるようになるでしょう。

また一方、このような世界の文化の調和が進んでい

く上で、世界中にある紛争や貧困、飢餓などの問題を無視することはできません。これらの問題を解決してこそ調和が進んでいくことができると考えます。APUのある日本は超経済大国であり、これらの問題に対して世界各国の学生と共に解決の道を探す活動を始めています。

特に我々が日ごろAPUで学んでいる経済・政治・環境・文化などの側面から問題をとらえて、またAPUでの多文化交流の経験を生かして、解決の道を探っていきたいと考えています。

このような活動は社会の一部を担っている大学生の役割であると言えます。また将来の自分たちにとって貴重な経験をするよい機会であると思います。そして日本や全世界がこれらの問題にもっと積極的な対応をしていくことを求めていると考えています。

このような活動を通して、APUにおいて実現されつつある世界の調和を、ぜひ全世界へ広めていきたいと考えます。APUには自分と同じ考えの学生がたくさんおり、この多文化調和の将来の世界像をAPUから世界に向けて発信していきたいと思っています。

APUでの体験と豊富な語学力を活かして、国際舞台で活躍したい



宋 鎮燮
SONG Zhenxie

APM 1回生
中国出身

私は中国上海にある復旦大学を卒業して、APUにきました。私は中国の朝鮮民族として韓国語ができ、そして復旦大学に入学してからは、ロシア語を専攻するかたわら、英語も独学で習得しました。さらに、中学生の時から日本語の勉強を始め、日本にいろいろな興味を持っていました。

私は、いつも言語は道具であり、それを駆使していろいろな専門を勉強しなければならないと考えています。復旦大学を卒業する時に、APUのパンフレットを見て、APUの国際性とマネジメントの教育にあこがれ、APUに入学することを決めました。また、日本はアジアで唯一の市場経済システムを持っている国で、中国にいた時から、日本に行き日本の独特な経営スタイルを勉強しようと思っていました。

私は、初めて日本にきた時はAPハウスに住みました。APハウスに着いて初めて館内に入った時、ロビーで黄色人種の学生、黒人の学生、白人の学生たちが日本語と英語を使いながら、懇談しているのが私の目に入りました。そして、彼らは“こんにちは”、“Hello”と、私に声をかけてくれました。この場面はまるで国連に入った感じでした。

APUでは日本語と英語の両言語で授業を行っているため、日本語ばかりではなく、英語のレベルも上げることができました。そして、APUにはいろいろなサークルがあり、国際学生と日本人学生と一緒に組織して、各国が持っている世界観と価値観を融合させ、価値観

の違いを克服しながら活動しています。

もっとも注目したのは、APUの学園祭でした。学園祭では各国の学生たちがステージで民族衣装を着て自分の国のダンスを披露し、屋台では出身国の代表的な料理を作って売りました。その場面はまるで国際市場に見えました。私はAPUで、日本の他の大学と違う独特な国際性を強く感じています。

現在の世界を見ると、グローバル化やボーダレスが課題になって、政治、経済ばかりか文化でもグローバル化を推進しています。APUでは生活環境、学習環境も異文化を充分に感じるように整備されており、学生たちは、卒業したら国際社会に挑戦できるように教育を受けています。私も、APUでの勉強を通じて、自分が持っている言語能力とAPUの貴重な経験を活かせば、きっと国際的な視野を持ち国際舞台で活躍していけると思います。

APUは、学習のみならず将来の活躍する舞台の方向性、人生において学ばなければならないことを教えてくれていると思います。

「違い」を大切に、「共通点を知る」ことができる大学



吉見 千歩
YOSHIMI Chiho

APS 1回生
愛知県・光ヶ丘女子高校出身

私は高校1年生終了後、ニュージーランドに1年間留学をしました。そしてこの留学の中で私をアジア太平洋地域の国々や人々について勉強してみたいと思わせる出来事がありました。それは、民族紛争の犠牲となったクルド人難民約50人の空港での出迎えに参加したことです。ニュージーランド人のニューカマーに対する暖かさ、その後の住居、職業斡旋や英語教育などの提供に地域の人々が一体となって取り組んでいることに対して、「私達日本人との相違」に大きなショックを受けました。そして世界、特に日本が所属しているアジア地域について知識を深め、それと共にアジアから多くの学生が来ている大学に身を置くことによって、書物からは得ることができないものを知りたいと考えてAPUを選びました。

APUに入学して早3ヵ月が経ち、私の予想していた以上にハードな日々を送っています。親元から離れて1人暮らしの大変さはもちろん、語学の修得、プレゼンテーションを中心とする学生自ら作り上げていく参加型の講義や、毎日の課題の量など、どれも予想以上に厳しいものです。しかし、これも私達APUで学ぶ者に対しての、社会の色々な方面からの期待の現われだと思っています。その中でやり遂げることが不可能だと思うことがあっても、先生方やクラスメイトのアドバイスによって背中を押されながら、達成後の充実感、は次への挑戦意欲に繋がります。

勉強面だけでなく、サークル活動も「APU神楽社」

に入部し、大学の域を越えた地域の人々との交流も学ぶところがたくさんあります。この活動を通して日本の伝統芸能を外国の人にも伝えることができれば幸いです。さらには海外で生活したいと考えています。現地での生活の中から、日本人である自分と生まれ育った日本を再認識したいと願っています。

今の私を一言で表現するならば「水を得た魚」そのものだと思います。21世紀は「アジアの世紀」になると思います。APUはそのアジア地域から国籍や文化の異なる多くの学生が集う大学です。そして異なることから生まれる「違い」を大切にする大学です。しかしその「違い」の中にも同じ人間としての「共通点」を知ることができる大学です。

私自身さらにこの大学での学びの中で、世界的な視野を持ちながら将来私が置かれた場所で、積極的に行動する社会人になりたいと思っています。私のモットーである「Dream it, Believe it, Become it」をいつも心に抱きながら…。

立命館アジア太平洋大学

大分県別府市十文字原1丁目1番 TEL: 0977-78-1120 URL: <http://www.apu.ac.jp/>